「考える私」以前

── デカルト的自我と幼児の自己認識 ──

田　村　　均

1　はじめに
2　コギト論証と指標語分析
3　5種類の自己知
4　環境に埋め込まれた身体
5　共同注意と対象化された「私」
6　むすび

1　はじめに

本論文の目的は、最近の発達心理学の研究成果にもとづいてヒトの幼児期（誕生から18月齢頃まで）の自己認識の発達過程を素描し、そこから得られる知見を自己認識に関する哲学的問題の理解に結び付けることである。本論文が取り上げる発達研究は、幼児の身体的自己把握、他者との情動的な相互作用、幼児と大人の共同注意（joint attention）の成り立ち、という3つの領域の研究報告である。自己認識の成り立ちに関する哲学的な問題を事実に即して理解する上で、これらの研究報告は示唆に富むものである。

自己認識の成り立ちが哲学の方法論で探究される場合、これまで主として以下の2つの問題に注意が向けられてきた。第一の問題は、一人称の代名詞「私」の指示作用をどのように解釈するか、という問題である。この問題は、デカルトの「私は考える。ゆえに、私はある。」という論証の解釈問題に端を発している。このコギト論証が直観なのか推論なのかという17世紀以来の大問題は、「コギト論証を理解することは、一人称の代名詞“私”の論理を理解する能力を前提にしている（Hintikka, 1962（1968）, 126）」というヒンティカの指摘によって、論理的には、一人称の代名詞ないし指標語（indexicals）[1]の理解の問題に帰着することが示された。

自己認識に関わる第二の哲学的問題は、記憶が人格の同一性を構成するのはどのような仕組み

[1] 指標語とは、「私」「あなた」「今」「ここ」「今日」「明日」「この人」「あの人」などのように、誰がいつその語句を発話するかに応じて、それが指定する対象が変わる語句のことを言う。指標性については2．2．1で取り上げる。

によってなのか、という問題である。この問題は、自己の人格同一性（personal identity）が意識と記憶に存するというジョン・ロックの主張に端を発している。ロックは、自分自身の自己同一的な存在は意識の事実にほかならないとするデカルト的な考え方を受容し、これに加えて、記憶が及んでゆくかぎり過去にも同一の自己が存在したことになる、という主張を立てた。すなわち、

> 「意識が過去の行為や思考に及んでゆくかぎり、その人格の同一性も及んでいく。〔過去の〕そのときあったのは、今ある同じ自己である。その行為が為されたのは、現在その行為について反省しているのは現在の自己と同じ自己によってなのである。(Locke, 1975, 2-27-9)」

こうしてロックは、デカルトのコギト論証を、思考する魂の連続存在を帰結する形而上学的論証として受容することを避け、むしろ、人間が物体とは異なる水準の同一性を記憶の働きによって保有することを心理学的に提示して、デカルトの心身二元論を経験論の枠組みの内側に再構成したのである。[2]

この 2 つの哲学的問題のうち、本論文に関係するのは第一の問題である。そこで、以下で参照される発達心理学の研究報告は、「私がある」ことの認知がどのようにして形成されるのか、また、そのとき「ある」とされる「私」はどのような内実を備えているのか、ということに関わっている。

新生児は言葉を話すことができず、もちろん自分を指す一人称表現を使うこともない。哲学の常套手段である言語分析の手法は、言語習得以前の幼児にはまったく適用できない。ところが、幼児は、言語以前の状態から通常 3 、 4 年で、自分や他人や事物についてかなりいろいろなことが理解でき表現できる段階まで到達する。

例えば、 2 歳半から 3 歳ぐらいの段階で、幼児はゴッコ遊び（pretend play）の設定を理解して、遊びの中で適切な受け答えができるようになる。この年齢の幼児は、すでに一連の反事実的な仮定を適切に解釈でき、その状況に合わせて自ら発話する能力を獲得している（Leslie, 1987；Leslie, 1994；Perner, 1988)。また、 3 歳前後の幼児は、現実の事物と空想上の事物を存在論的なカテゴリーとしてきちんと区別しており、夢の出来事や空想上の存在者の特性を的確に理解している（Wellman and Estes, 1986)。また、彼らは他人が自分とは異なる欲求を持ち、他人は他人なりの欲求に従って行為することを理解しているし、他人に客観的事実についての新たな情報が与えられれば、その人物はその新しい情報にもとづいて（つまり、信念体系に変化が生じて）それまでとは異なった行為をする、ということも理解している（Wellman and Bartsch, 1988)。

[2] ロックとデカルトの相違について詳しくは田村 2000 を見られたい。

3歳児は欲求と信念についてのこのような初歩的な理解をすでに持っている。しかし、他方で、平均的な3歳児は、人々が誤った信念を心に抱きうるということをうまく理解できない(Wimmer and Perner, 1983)。人々は事実の表象をそれぞれの〈心の中〉に抱いており、それらの表象は真である場合も偽である場合もある、という理解は、3歳児にはまだ成立していない。この意味で彼らの信念理解は不完全なのである。私たち大人は、常日頃、暗黙の裡にヒトの心のこの表象的な特性を前提して生きているが、幼児がこのような常識心理学(フォークサイコロジー)ないし“心の理論”を獲得するのは、4歳を過ぎる頃である[3]。

一人称の表現は、幼児がこうして2歳から4歳ぐらいにかけてゴッコ遊びをしたり他人の心を読んだりできるようになる頃には、遊んだり考えたりすることの必須の前提としてほぼ適切に習得されているはずである。幼児は、言葉をまったく使えない状態から何とか使えるようになるまでの、おそらくかなり早い段階で、一人称表現をそれなりに使いこなせるようになる。それならば、その端緒は言語習得以前の認知と行動の体験の中にあると考えるほかはない。言い換えれば、“心の理論”に従って自分と他人を的確に理解できるようになる以前の経験に、自他の識別と理解を形成する原初的な体験がある。ジェローム・ブルーナーは、この点を次のように指摘している。

> 「言語が相互作用の道具としての役割を果たすようになる前であっても、ヒトは、何らかの前言語的な“心の理論”が無ければ、他人と人間らしく相互作用することはできない。この前言語的な“心の理論”は、人間の社会的行動に内在しており、初期の未発達な段階にふさわしい形態で表現される。例えば、9月齢児が大人の“指差し”の方向を見て、そこに何も発見できないと、振り返って、大人の指差しの方向だけでなく今度は視線の方向をチェックする、といったことである。この常識心理学の先行形態から、ついには、指示語や名付けといった言語的な成果が出現してくる。(Bruner, 1990, 75：強調は原文)」

このブルーナーの説明によれば、言語習得以前の幼児は、たとえ心の表象性を理解できないにしても、母親の身振りや視線の方向から母親の注意がどこに向かっているのか解釈でき、試行錯誤しながら母親と共通の対象に注意を振り向けることができる。それならば、幼児の中には、母親は自分とは違う何かに注意を向けているらしい、という前言語的な洞察があると考えるほかない。自分と母親の間で、注意の向かう対象の一致不一致が問題になるということは、とりもなおさず、自分が他人とは違う何かとして、また他人が自分とは違う何かとして、暗黙の裡に把握されていることを示している。言語習得以前の幼児には、前言語的な自他の識別と認知が存在する

[3] “心の理論”の獲得問題は、発達心理学の領域で過去20年余り非常に活発な研究が行なわれてきた。これについては田村2004の紹介を見られたい。

はずなのである。

前述のように、ヒンティカがコギト論証の根底に発見したものは、一人称の理解という言語能力の問題であった。ヒンティカの考えは次のように要約できる。解釈のカナメに来るのは、誰かが「私は存在しない」と他人に向かって言ってみても、他人にそのとおり信じて貰うことは不可能だ、という明白な事実である（Hintikka, 1962（1968), 125)。この事実を、ヒンティカは「私は存在しない」という言明の、存在に関する不整合性（existential inconsistency）と呼んだ。これはどの自然言語の使用にもついてまわる普遍的な事情である。しかし、この明白で普遍的な事実を理解するための条件が一つある。それは、「私は存在しない」の不整合性を理解できるためには、最低限、聴き手は、この発話において存在しないとされる当の人物が、発話者その人である、という点を捉えていなければならないという条件である。これが、「一人称の代名詞“私”の論理を理解する能力（Hintikka, 1962（1968), 126)」を聴き手が持っているということの実質である。ヒンティカは、これを「デカルトのコギト論証の洞察は、“自分を知っている(knowing oneself)”ということに依存している（Hintikka, 1962（1968), 126)」とも表現した。

ブルーナーの指摘とヒンティカのコギト解釈を結び付けると、次のような洞察が成り立つ。まず、言語を使う以前から幼児は大人とコミュニケーションをしているのだから、“自分を知っている”ということは、何らかの形で前言語的に成立しているはずである。そして、この前言語的な自己把握の上に一人称の言語表現が習得され、言葉を使って他者と相互作用することが可能になると考えられる。従って、コギト論証の理解も、この前言語的な自己把握を前提とするに違いない。

本論文はこのような洞察に沿って、前言語的に成立している自己認識を発達心理学の研究報告によって浮かび上がらせる試みである。

以下、2において、一人称表現に関するD．H．メラー（D. H. Mellor）とR．ハレ（R. Harré）の分析を検討する。

3では、アーリック・ナイサー（Ulric Neisser）の自己認識の発達図式を紹介し、自己認識にかかわる発達心理学的な問題領域を提示する。

4では、自己受容感覚（proprioception）を通じた身体的な自己把握の問題と、幼児と養育者との情動的なコミュニケーションの問題を取り上げる。

5では、幼児と大人との共同注意と言語習得、および自己の対象化の問題を取り上げる。

6において、本論文から得られる知見がまとめて提示される。

2　コギト論証と指標語分析

2．1　メラーの分析[4]

メラー（D. H. Mellor）は、一人称の指標語「私」がどのようにして指示に成功するのかという問題を、動物としての私たちの行動の水準から捉え直した。動物は、生き延びるために、自分の目の前に食べ物があるとか、捕食者が自分のいるところに近づいているとか、自分にとって適切な交尾相手がいるといったことをうまく認知できなければならない。自分自身への関わりを含む認知状態は、動物の多くが持っている。それならば、動物の自己に関わる認知状態一般を説明できれば、「私」を含む発話は、その言語化された特殊形態として派生的に説明できるだろう。メラーは、こうして「私」の指示作用を、生きている身体に生起する欲求と信念と身体運動の因果的つながりによって説明した。(Mellor, 1991, 17-29)

2．1．1　動物としての自己把握

動物の自己に関わる認知状態一般を、メラーは「主観的信念（subjective belief)」と呼ぶ。それは、例えば「私は今食べ物を目の前にしている」といった内容の認知状態である。ヒト以外の動物は言語を持たないから、自分の認知状態をこのように表現しないばかりか、内省的に自覚してもいない可能性が高い。だが、このような非言語的な認知状態がヒト以外の動物にも宿りうることは承認してよいだろう。

この、非言語的な認知状態という意味での主観的信念は、信念保有者の行動への因果的影響の違いによって相互に区別される。「私は今食べ物を目の前にしている」という信念は、そのとき同時に存在する他の欲求と合流して、目の前にあるものを食べてしまう（空腹のとき）とか、貯蔵しておく（後で食べたいとき）とか、この信念の保有者のいろいろな行動に結びついて行く。メラーは、信念を機能主義的に理解するのである。

> 「簡単に言うと、『私は今食べ物を目の前にしている』を信じるということが、欲求から行為へと到る因果的機能を具体化するよう私を促すのである。ちょうど、食べ物への欲求が、信念から行為へと到る因果的機能を具体化するよう私を促すのと同様である。(Mellor, 1991, 22)」

「私は今食べ物を目の前にしている」という主観的信念は、このように欲求と合流して行動を引き起こすのだが、メラーによればむしろ逆に、「ある信念は、行為者の欲求の結果に影響する仕方によって、主観的になる（Mellor, 1991, 24)」と言うべきなのである。これはつまり「そ

[4] 以下のメラーに関する分析は、田村 2000, 55-66 頁から要点を抜粋し、検討し直したものである。

の行為者がその時刻にその信念を持つという場合にのみ、主観的になるということ（Mellor, 1991, 24)」である。或る信念がその保有者自身に関わる信念（主観的信念）であるとは、その信念が欲求と合流してその動物を何らかの仕方で行動させるということなのである。

「私は食べ物を目の前にしている」という信念は、空腹ならばそこにあるその物を食べる、というふうに促されるということだとしよう。こう促されるということは、その時刻に私のその信念と私の空腹が私を促すということである。信念と欲求が合流するのはそれらが宿っている身体においてである。この主観的信念が動物 x の空腹をして時刻 y にある行動を起こさせるよう促すためには、因果は遠隔作用しない以上、この信念をまさに動物 x が時刻 y に持つのでなければならない。主観的信念がその保有者とその時刻に特異な仕方で結びつくのは、主観的であるということの定義自体から、すなわち保有者自身に関わって行為を促すということ自体によって、信念がそのときその保有者に宿るということが因果的に必要であるからにほかならない。メラーは次のように言う。

> 「人物と時刻とについてトークン反射的な真理条件を主観的信念に与えるのは、この事情である。因果的隣接性（causal contiguity）が、主観的信念に、誰であれそれを持つ者とそれを持つ時刻とに関わらせる（refer to）仕組みなのである。（Mellor, 1991, 24)」

そしてこの因果的隣接性の条件が、主観的信念にまつわる謎を大部分解いてしまう。第一に、私とは何者なのかを認識していなくても、主観的信念はその保有者（関わりをもつ対象、つまり指示対象）を誤り無く特定する。因果的隣接性が、「主観的信念の指示対象を決める上で、自分が誰であるかとか今何時であるかとかを一切考える必要がない、ということの理由（Mellor, 1991, 25)」なのである。というのも、主観的信念「私は今……している」が指示対象に関わりを持つのは、その指示対象がその信念によって因果的に行動を促される動物自身であるからなのである。因果的な関わりが主観的信念の指示対象（その動物自身）を特定する。その動物がその信念を通じて自己という対象を意味論的に指示するからではない。だから、「自己や現在の概念（concept）は一切必要ない。私の主観的信念の指示対象を決めるためには、判明にであれ暗黙にであれ‘私’や‘今’の‘意味合い（senses)’を捉えている必要など全くない。因果的隣接性が私のためにそれらを決めてくれるのだ。（Mellor, 1991, 25)」

第二に、指示の仕損ないをめぐる謎も消える。或る人物Hが或る時刻Tに食べ物を目の前にしているという私の三人称的な信念は、間違うことがありうる。Hなる人物はいないかもしれないし、別人と取り違えているかもしれない。だが、主観的信念ではそういう指示の仕損ないは起こらない。「なぜなら、主観的信念はその指示対象が存在しない限り存在し得ないからである。x が時刻 y に『私は今食べ物を目の前にしている』と信じるということは、x と y が存在しなけ

れば起こるはずがない。(Mellor,1991, 25)」

以上の議論は非言語的な認知状態に関する議論である。だが、これを拡張して、一人称の発話に現れる「私」や「今」の指示の特異性も、信念とその保有者が因果的に結びついているという因果的隣接性によって解明できるのではないかと期待される。動物にもありうるような暗黙の自己把握の段階の主観的信念には、自分についての意識的な把握や、まして「私」という発話などは登場していない。これらが登場しても、指示対象を特定するのに必要なのは概念や意味ではなくて因果的なつながりであり、指示に失敗しないのも因果的つながりがあることが信念成立の条件だからだ、と言うことができるのかどうかが問題である。

2．1．2 「私」の指示するもの

手がかりになるのは、複数の主観的信念が重なり合って起こる場合である。2つの主観的信念が同時に同一の信念保有者に起こる場合には、これらの信念の保有者xと時刻yとは、これらの信念にxとyへの関わりを持たせる共通の因果的要素になっている。そして、依然として、xやyについて保有者が概念をもっていたり、意味を捉えていたりする必要は無い。主観的信念が信念の保有者と時刻とに結びつくのは、因果的隣接性によるからである。つまり2つの主観的信念は、因果的に同一の存在に同時に関わっているということによって、同じx同じ yを捉え続けるのである。「複数の主観的信念における指示の関係は、たんに同一性の関係である。(Mellor, 1991, 27)」

このことは、ヒトの意識的な主観的信念の水準においても同じように成り立つ。人物xが時刻yに「私は今食べ物に目の前にしている」と意識しつつ信じているとする。これは、自分が信じているということをxが信じている状態である。「このとき、この人物の信念が自分はそれを持っているということをこの人物に信じさせている。(Mellor, 1991, 27)」つまり、第1階の信念が、第2階の信念を因果的に生む[5]。仮定によってどちらも主観的な信念であるから、信念の保有者xと時刻yとは、信念と欲求から行動に至る因果的系列の中に在ることによって、同じx同じ yとして捉えられ続ける。それならば第2階の意識的信念の水準までたどってきても、主観的信念の保有者「私」を、概念や意味といった認識的手がかりを通じて突き止めるという課題は生じない。

こうして、意識的な信念を言語化する手立てを考える段になる。「私は今食べ物に目の前にしている」という信念を意識しているとき、どのようにしてこれを言語化したらよいのであろうか。この段階で新たに必要になるのは、言語に関する共有された習慣である。この信念にどのような文をあてがうかというのは、言語共同体によって異なる。しかし、この信念の保有者と時刻とを

[5] メラーは「インサイト insight」と名付ける一種の仮説的なモニタリング機構をヒトの認知システムに導入する。「インサイトは自分が信じていることに接近するための、間違いうるとしても特権的な、知覚的メカニズムである。(Mellor, 1991, 27)」

捉えるために、特別の認知上の手がかりは必要とされない。保有者と時刻は、主観的信念において因果的隣接性によって指定されているからである。このことは、どんな言語共同体に生きていても不変である。必要なのは、このようにして指定される対象や時刻を表示する語の選び方についての習慣だけである。だから、日本においては「私」と「今」が選ばれるであろう。

> 「私がこれらを選ぶのは、たんに、自分が表現したい主観的信念のための正しい単語であると信じるからである。そして、この〔言語使用についての〕信念が正しいというのは、たんに、これらの言葉を使う私の習慣を皆が共有している、ということにすぎない。習慣が共有されているということが、「私は今食べ物に目の前にしている」のような文において、「私」と「今」のトークンに、この文の作り手とその時とを指示するようにするのである。私たちがお互いを理解するのは、これらのトークンが実行していることはこれだ、と信じているからである。……それと知りつつ共有されている習慣が、それゆえ、いかなる時点においても「私」と「今」を私が正しく適切に使用するために必要なすべてである。依然として私は、自己や現在の概念を必要とはしていない。(Mellor 1991, 27-28)」

こうして、メラーは、主観的信念が行動形成のメカニズムを通じて生きている身体に因果的に結び付いているという事実から、一人称の代名詞「私」の指示作用が概念化された意味内容を経由せず、かつ決して誤らないという特性をもつことを説明してみせた。

2．2　ハレの分析

ハレ（R. Harré）は、各国語の比較検討と分析を通じて、指標語としての一人称表現の役割を抽出した。そして、デカルト以来の西洋近代哲学における特別の主体としての“私”の捉え方を、一人称の指標的特性に関するある種の誤解によってもたらされたものとして説明した。

2．2．1　一人称の二重の指標性

指標語（indexicals）とは、代名詞「私」や指示語句「その人」のように、誰がいつそれを発話するかによってその語の指定する対象が変わる語のことを言う。言語表現の指標的な特性という問題を初めて浮かび上がらせたのはパース（C. S. Peirce）である。彼は次のような機知に富んだ言い方で表現の指標性の問題を指摘した。

> 「例えば、誰かが“Why, it is raining.”〔おやおや、雨が降っている〕と言ったとする。この発話がこの時点でこの場所について発話者が述べるものとなるのは、その人がここに立って話しながら今窓から外を見ているといった発話状況によってのみである。

それは指標（Index）として機能している。この発話状況によって、私たちは、この人が衛星プロキオンの 50 世紀前の天候について話しているはずがない、ということを確実に知ることができるのである。〔強調は原文〕」[6]

例示された“it is raining”あるいは「雨が降っている」という発話は、降雨という現象を表現しているが、この表現内容が発話者及びその状況と結び付けられないかぎり、この発話が具体的に何を言いたいのか十分には分からない。アーサー・バークス（Arthur Burks）によれば、上の発話が備えている指標的な要素は、現在時制が使用されているという事実と、発話者の視線の方向である。これらによって、この発話が今とここについての発話であることが示される（Burks, 1949, 677)。そして、「私」「今」「ここ」といった語は、現在時制の使用や視線の方向と同様に、或る発話がどのようにして世界と結び付けられるべきなのかを指定する働きを持っている。その意味で、これらは発話と世界との結び付け方のしるし（指標）となる語なのである。

ハレによれば、一人称の発話は、その指標的な働きにおいて、発話内容を発話者の身体の位置に結び付け、その身体の位置からのパースペクティヴとして世界を提示する働きを持っている。「私には雨が降っているのが見える」という明示的な一人称の発話[7]を考えてみる。ヒトの知覚野は或る一点を中心とする構造を備えていて、その一点が、世界の中の諸対象の知覚と、私たちの身体についての知覚との、両方の中心になっている[8]。

「この中心性は、私の持つ自己であるという感じ（my sense of self）の構成要素となる特異な単独性（singularity）の一つである。私が見たり、感じたり、触ったりしたことを記述するときには、私は、これらの記述の中で、私の経験が中心を備えているということを表出している。(Harré, 1998, 59)」

言い換えれば、「私には雨が降っているのが見える」という一人称の発話では、「雨が降っている」において時制や視線が果たしていた役割を「私」という一人称の表現が引き受ける。一人称の使用が、降雨現象を、発話者の身体位置（経験の中心）からのパースペクティヴを通じて世界に結び付け、そのときその場所における世界の記述として提示しているのである。このように、

---

[6] *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*. 4.544 (Edited by C. Hartshorne and P. Weiss, 1933). Burks, 1949, 677 における引用による。

[7] ハレの説によれば、「雨が降っている」というような発話者を明示しない報告文は、非明示的な（implicit）指標的表現（Harré, 1998, 60）あるいは非表示の（unmarked）一人称であり（Mühlhäusler and Harré, 1990, 94)、「私には雨が降っているのが見える」は明示的な（explicit）指標的表現、ないし表示された（marked）一人称である。

[8] この 2 系統の知覚は、それぞれ外界受容感覚（exteroception）と自己受容感覚（proprioception）である。４．１で、この 2 系統の知覚の相関性を論じる。

一人称表現は、「自分自身の特異な単独性についてある人が持つ感じの表出（Harré, 1998, 55)」であることによって、指標性を実現する。それは、「いろいろな次元を備えた人物（person）としての、なかんずく、自分の物質的身体化（one's material embodiment）における特異な単独性という側面での（Harré, 1998, 55)」自己感覚の表出なのである。ハレの言う「物質的身体化における特異な単独性の感じ」は、メラーが一人称の根底に見出した動物としての自己把握、つまり自分の信念や欲求によって自分の身体が自在に動く感じと同じものである。

ハレがメラーと異なるのは、人物には身体という切り口だけでなく「いろいろな次元」があることを指摘している点である。物質としての身体は、世界の事物の間の一つの物体である。だが、生きているヒトの身体は、たんに物質的世界の一メンバーであるだけではなくて、常に義務や役割や社会的地位の中に位置づけられている。ヒトはたんに動物であるのではなくて、社会性の動物である。

例えば、「私は弁護士への面会を要求する（I demand to see my lawyer)」という一人称の発話は、第一に、面会要求という発話内容を、発話者の身体の位置および発話の時点に結び付ける。こうして、まずは面会要求が話し手の現在の要求であることが明示される。これは身体的な位置づけである。だが、第二に、この面会要求の効力は、発話者の社会的な位置と結び付いて決まることである。要求という言語行為は、発話者の身体的位置からのパースペクティヴを通じて物質的世界と結び付けられるだけでなく、発話者の社会的位置からのパースペクティヴを通じて道徳的世界に結び付けられる。一人称の表現は、発話内の力（illocutionary force）や発話を通じた力（perlocutionary force）の発動の責任を担う主体として発話者を指定し、発話者とその周囲の社会的環境との結び付きを示してもいるのである。一人称の表現によって、或る要求は、今とここにおけるその人の要求になるだけでなく、この社会的環境におけるその人の要求になる。あるいは、一人称の使用によって指定される今とここは、純粋に物理的な時空だけではなく、社会的な今とここであると言ってもよいだろう。(Mühlhäusler and Harré, 1990, 92ff.)

そして、「私には雨が降っているのが見える」といった事実報告文についても、同じ二重性を指摘できる。降雨という現象は、発話者の身体的位置からのパースペクティヴを通じて物質的世界と結び付けられるだけでなく、発話者の社会的位置からのパースペクティヴを通じて道徳的世界に結び付けられる。事実報告の場合、発話者は、報告の信憑性について責任を引き受けることになる。「事実言明は、話し手によって権威のラベルを貼られている。だから、その言明の発話内の力は、その話し手の信頼性に相対化されるのである。(Mühlhäusler and Harré, 1990, 92)」

一人称の使用が道徳的な世界における発話者の位置取りの指標になっているという考え方は、いくらか呑み込みにくいところがある[9]。しかし、例えば近代的な裁判制度における証言は、一

[9] 作家の片岡義男は、青年期前半をアメリカンスクールという異文化環境で過ごした（作家の小林信彦が或るエッセイでこう記していたと記憶するが、今、典拠を明示できない）とのことであるが、英語の‘I’が担っている道徳的な重さについて次のように語っている。

人称の事実報告が発話者のパースペクティヴを通じて道徳的世界に位置づけられるということの、端的で極限的な発現形態である。現代日本の裁判では、証人は、自らが体験した事実を報告することのみが求められる。法廷で自分の意見を開陳したり、伝聞を陳述したりすることは許されない。また、証人に対する誘導尋問は原則として行われてはならず、供述は自発的に為されなければならない。要するに、証人は、一人称的に体験した事実のみを自発的に供述することが求められており、そのような供述にのみ信用性が付与される。従って、証人は、そのような供述を行なうものとして、法廷という環境における一人称の発話を通じて、自己を定義し直すことになる。すなわち、自分の身体の位置からのパースペクティヴにおいて体験された世界を陳述し、その陳述の真理性を言語行為において保証する存在として、自己を規定することになるわけである。

ハレは各国語を比較検討して、一人称の使用が自然的環境のみならずさまざまなローカルな社会的・道徳的環境への位置づけをともなうことを示している。例えば、「日本語の一人称形態は、局所的な社会秩序内における話し手と聴き手の相対的な地位関係を含意する強い指標性を備えている（Harré, 1998, 58）」という事実、或いはインドネシア諸語の幾つかにおいては人称代名詞が時間的な指標性をともなっている事実（Harré, 1998, 58）などを挙げ、人称を表現するシステムが、発話者の身体の空間的位置、発話者の道徳的位置、社会的地位、時間的位置、といったいろいろな要素に関して指標性を備えうることを指摘する[10]。多数の言語を比較検討して言えることは、「自己という感じの一見捉え難い表出を、いったいどこに探したらよいのだろうか？たぶん、……、一人称の使用や、代名詞と動詞の変化、指示語と時制においてだろう。こういった文法的装置のどこかに、自己の感じの本性が見出されるにちがいない。（Harré, 1998, 59）」ということである。

このように、印欧語に準拠しつつ、印欧語以外の言語にも目配りしてハレが一人称について得

「Ｉとは、いまここにいるこの私という、ただひとりの人を具体的に意味するだけでは、けっしてない。Ｉはたまたまそこにいるそのひとりの人を意味するだけではない。Ｉは、その人が一員となっている社会が拠って立つ理念から至近距離にいるはずの、その理念の体現者としての最小単位のひとつだ。Ｉは、自分のものの考え方や信念に相応して発生する社会的責任の、発生点および引き受け点だ。（片岡義男,（1997）『日本語の外へ』筑摩書房, 366：強調は引用者）」

ハレが言おうとしていることは、ここでおそらく実感にもとづいて片岡が指摘していることに、かなり近いのではないかと思われる。そしてそれは、片岡が「英語のＩに相当する言葉は、日本語にはない。これは、なんとも表現しようのない、たいへんなことだ（片岡, 1997, 359）」と確認するとおり、‘Ｉ’を用いない私たちにとっては何か非常に理解しにくいことである可能性が高い。

[10] Mühlhäusler and Harré, 1990, 105-114 に各国語の比較検討がある。日本語の一人称の特徴はその中の 112-113 で触れられている。日本語においては、「ほとんどすべての一人称指標語の使用例が話し手個人というよりも‘グループ内の私（me-group）’について行なわれるが、それだけでなく、その一人称表現の一覧表はグループの決定する公式性と非公式性の複雑な連続的変化を含んでいる。私たちがその体系を把握できたかぎりにおいて、その原則は、一人称語がより公式的になればなるほど、話しかけられている相手への尊敬が示されるということらしい。112」これに対し、「英語の‘Ｉ’は話し手と聴き手の社会的な地位を未決定のままにしておく。113」

た基本的な考え方は、上述のとおり、一人称の表現が発話者の身体的位置と社会的位置との双方の指標となって、発話内容と自然的世界および道徳的世界との結び付き方を示す、という二重の指標性（double indexicality）の着想である（Mühlhäusler and Harré, 1990, 91-105；Harré, 1998, 55-64)。

この二重の指標性は、ヒトが身体をもった動物である事実と、ヒトが特に社会性の動物である事実とに根ざしている。従って、前者の指標性はほぼ同じ形であらゆる言語に見出されると予想してよい（Mühlhäusler and Harré, 1990, 106)。だが、後者の道徳的な指標性は社会構成の相違によって異なる現れ方をすると考えられる[11]。そして、この二重の指標性への着目が、デカルト的自我を解釈し直す手がかりとなる。

2．2．2　二重の指標性とデカルト的自我の自然主義的解体

ハレによると、デカルト以来の伝統では、自己の感じ（the sense of self）とは或る存在者がそれ自身の実在性について得ている暗示的な告知（intimation）のようなものである。コギト論証は、この暗示を論理的に分析して展開したものである。その分析の結果、思考する魂が「「私」という語がそれぞれの人物によって使用されるときの実体的な指示対象（Harre, 1998, 4)」として、身体と区別されて取り出されることになる。

ハレは、このような「‘存在者’による説明は間違いである。それは科学的に間違いなのであって、ちょうど燃焼のフロギストン理論が間違いであるのと同じ仕方で間違いである（Harre, 1998, 4)」と考える。間違いを示す戦略は、二重の指標性に立脚した一人称表現の分析である。なぜなら、「「私」の使用が物理的および道徳的空間における位置を示す指標として余すところ無く説明できるのであれば、実体を二重化することで人物であるということを説明しようとする実体主義者の形而上学は不必要になる（Mühlhäusler and Harré, 1990, 96)」からである。一人称の代名詞「私」は、ハレによれば、思考する魂実体を指示するためではなく、生きている身体としての一人のヒトが世界とどのように関わっているかを表出するために用いられている。

---

[11] Mühlhäusler and Harré, 1990 の次のような指摘を参照されたい。

「日本語においては道徳的秩序内の位置への指標付けは、話し手個人というよりも、関わりのあるグループに対して行なわれるから、個人の責任を指標付けする代名詞の使い方は弱体である。(Mühlhäusler and Harré, 1990, 93)」

「ギアーツは、バリについて、個人の社会的役割が‘自己の実体’を含んでいる、と主張している。西洋人は――とギアーツは言うが、むしろ指示を幾分鋭くして‘英語の話し手は’と言いたいところである――『人格同一性の核心として心理学的特性に焦点を置く』ことが自由にできるが、バリ人は、『社会的位置に焦点を置いて、自分の役割が真の自己の本質であると言う』。そこで、或る人物の任務や義務と、その人物の功績となることとは、関わりのある人物たちの社会的関係に依存するのであり、そのゆえにこれらの人々の社会的カテゴリーに依存するのである。バリや伝統的日本やニューギニアのような文化の倫理的体系は、普遍的な権利と義務を持ち意思決定と行為の唯一の実効的力である…道徳的個人を認識していない。(Mühlhäusler and Harré, 1990, 113-114)」

一人のバードウォッチャーが「サンカノゴイがいる！（There's a bittern!)」[12]と言ったとしよう。この発話は、物質的環境についての発話である。しかし、非明示的には、(implicitly）環境の中での話し手の位置に指標的に結び付けられており、同時に、話し手が対象に気づいたのが視覚によってであることも、言外に示されている。(Harré, 1998, 60)

他方、「私にはサンカノゴイが見える（I can see a bittern.)」という「私」を使用した発話は、同じく物質的環境についての発話であるが、明示的に（explicitly）話し手の身体の空間的位置に結び付けられ、同時に、話し手が対象に気づいたのが視覚を通じてであることも明示されている（Harré, 1998, 60)。

「私」という語が、発話内容と世界とを結び付ける位置を示す指標として用いられていることを認めるなら、一人称表現が明示的に使われているからといって、第2の発話例が「現象学者やセンス・データ論者が言うように私の何らかの状態を記述している（Harré, 1998, 60)」ということにはならない。哲学者が考えがちなように、第2の発話例では、第1の発話例と違い、「私」によって指定された存在者に心的表象を取り扱う認知的機能が与えられ、それによって特有の内在性が帰属されている、というわけではないのである。それはちょうど、「'ワシントンＤＣは北緯39度、西経77度にある'という文が、緯度と経度のグリッド上に場所を指定する表現の提示する何ものかに、ワシントン性を帰属させるわけではないのと同じ（Harré, 1998, 61)」である。第2の発話もまた世界の状態についての発話、ただし話し手の身体の位置からのパースペクティヴとの結び付きを明示した発話であるにすぎない。この2つの発話は、「経験的内容において同一であるが、'文法'において異なっている（Harré, 1998, 61)[13]」のみである。

この'文法'の違いは、結局、「私」を明示的に用いた発話においては、世界が記述されていると同時に、「私」という視点が表出されている、ということに尽きる[14]。例えば、「私にはマッ

[12] サンカノゴイは、「コウノトリ目サギ科の鳥。全長約75cm。ゴイサギよりひとまわり大きく，羽色は黄褐色で，全身に黒い縞や不規則な模様がある。……昼間人が近づくと，くちばしを上に向け，くびをのばし，直立した姿勢でじっとしている。そうすると体の模様が周囲のヨシにとけ込み，発見を免れるわけである。体を外界の事物にまぎらわせて敵の目を逃れる方法を一般に擬態と呼び，いろいろな動物で見られるが，この鳥の擬態はその好例として名高い。(『CD-ROM 世界大百科事典　第2版』©1998-2002Hitachi Systems & Services, Ltd.)」というわけで、バードウォッチャーにとってなかなか興味深い鳥のようである。

[13] ここで「文法」というのは、「言語ゲームの諸規則」というヴィトゲンシュタイン的な意味である。ハレは、次のように説明している。

「生活諸形式（forms of life）は、それぞれが一つの文法（a grammar）によって、つまり、ゆるやかに組織された一連の規則と習慣によって形づくられる。私たちが考え・行ない・言うことは、これらの規則と習慣に従って評価される。人々が、自分たちの生活形式を定義している規則に従って行為するよう訓練されているかぎりで、人々はその生活形式を再生産する。一つの生活形式が具体的な形をとるのは、諸々の言語ゲームにおいてである。言語ゲームとは、主として人物間で行われる活動であって、しばしば物を扱うスキルをともなっており、そのゲームの中で言語が多様で不可欠な役割を果たすのである。これらの諸活動に対する規範の制約は、周囲の条件と為すべき仕事が要求する度合いにおいてのみ、強制力をもつ。(Harré, 1998, 22)」

[14]「記述（description)」と「表出（expression)」の対比もヴィトゲンシュタイン的な対比である。

トレスの中に固いものが在る感じがする（I can feel a lump in the mattress.）」という発話は、マットレスを記述しており、かつ、私の視点を表出している。ヴィトゲンシュタインにならって言えば、話し手は、その固いものについて証拠を挙げることを要求されるかもしれない。しかし、その固いものの感じの経験を自分に結び付けるためには、証拠を必要としない。それを感じているのが私ではないかもしれない、という可能性を除去する必要がそもそも無いのである。「私」という指標語を用いることによって実現されるのは、世界についての或る記述が、話し手の身体の空間的位置に結び付けられるということである。そして、ここでメラーの分析を応用すれば、マットレスの或る感じは、生きている身体の因果的なメカニズムによって或る行動（この場合は発話という行為）を起こすようにその感じの生起した動物を促した[15]のであるから、この一連の因果系列が生起したのがその動物の身体ではないかもしれないという疑惑は、あらかじめ排除される。

もちろん、言語行為の場合、そのような因果系列がそもそも生起していないかもしれない、という疑惑は排除されない。ヒトは嘘をつくことができる[16]。しかし、その嘘においても、その偽装された因果系列の位置する場所が発話者の身体ではないかもしれない、という疑惑は提出しようがない[17]。この疑惑が排除されているということは「私」の‘文法’の一部なのである。かくして、「私」は指示の仕損ないを起こさない。あるいはむしろ、「私」は存在者を指示するための言語装置の一つではない[18]。「「私」は、私が自分の視点を表出するための文法的な装置の一部分

ハレは次のように説明している。

「ヴィトゲンシュタインは、心の状態や心像といったものを記述することdescribingと、‘それが私にとってどうあるかhow it is with me’、つまり私がどう感じているかを表出するexpressingこととの、徹底した違いを展開している。記述する場合には、証拠を立てる余地があり、誤りの余地もある。表出する場合には、唸り声と当該の感じthe feelingとの間には何のギャップもない。それはあたかも、その感じが、唸り声を立てる傾向の基づいている証拠ででもあるかのようである（as if the feeling were evidence on which the tendency to groan were based）。唸り声は感じを表出しているthe groan expresses the feeling。感じを記述しているのではない。或る感じと、唸り声を上げたり、溜め息を洩らしたり、痒いところを掻いたり、めそめそ泣いたりする潜在的性向や傾向性とは、同一の現象の全体を成す諸部分integral partsなのである。どちらかを捨象してしまえば、その現象はもはや違うものになってしまう。もしも私たちが唸る傾向をまったく持っていなければ、その感じは、それがどんなものであるにせよ、痛みではありえない。言語使用の表出的諸方式は、私たちのさまざまな感じ方についての、あらかじめ存在している動物行動学的に自然な表出レパートリーに基づいている。つまり、悲しかったり、痛かったり、幸せだったりする際の自然な表出方法に基づくのである。これは、人類の自然誌の一部である。（Harré, 1998, 41）」

[15] この因果系列の生起が前注に言う「人類の自然誌の一部である」ということの実質である。

[16] 痛くないのに痛いフリをして嘘をつくことは容易である。この種の嘘は、記述として虚偽なのではなく、表出として（すなわち行為として）不誠実なのである（Harré, 1998, 42）。

[17] この事情は、デカルトの議論に結び付ければ、欺く悪霊を想定しても欺かれる存在者はいるのでなければならない、ということに該当すると思われる。

[18] 一人称の代名詞は指示しているのか否かという問題については、Glock and Hacker, 1996を見よ。指示派と非指示派の論点を対比しつつ、指示（reference）という言語哲学的な概念自体をどう捉えるかという考察が行なわれている。なおGlock and Hacker, 1996は、衰弱した指示表現と見なす立場を取っている。

なのであって、属性や状態が帰属される主語的存在者（a subject）を指示する仕掛けなのではない。(Harré, 1998, 61)」

ここまでのハレの議論は、しかし、自己意識の局面を取り扱っていない。普通の知覚言明の中に出現する「私」の使用例を扱っているだけである。考えたり感じたりしている私を対象化する自己意識の体験においては、「属性や状態の帰属される主語的存在者」が姿を現すと言えるのではないだろうか。この疑問は、知覚言明を従属節に含む複文、例えば、「私にはサンカノゴイが見えていると〔私は〕思う（I think I can see a bittern.)」[19]といった文を考察することによって解消される。

上記の文で従属節の「私にはサンカノゴイが見えている（I can see a bittern)」に現れる‘I’の関わる存在者を、「サンカノゴイが見えている」という内在的表象が帰属される対象と考えると、容易に「私という主語的存在者」の幻想が生まれる。しかし、繰り返せば、「私にはサンカノゴイが見えている（I can see a bittern)」は、「サンカノゴイがいる！（There's a bittern!)」と同一の事実を、話し手の身体の位置からのパースペクティヴを明示して提示しているのみであり、「私」は発話内容が世界と結び付く位置を示す指標的な仕掛けなのであった。同様にして、主節‘I think’に現れる「私」も指標的に捉えることができる。ハレに拠れば、それは次のようなことである。

> 「もしも私が「私にはサンカノゴイが見えていると〔私は〕思う（I think I can see a bittern.)」というなら、私の主張は、依然として、沼地の縁のそこのところにサンカノゴイがいるということではあるが、しかし、従属節を埋め込む枠組みが私の断定の強さを修飾するのに役立っている。この発話は、「私を信じろ。あれはサンカノゴイだ！(Trust me: it's a bittern!)」の備えている最大限の力からは後退している。(Harré, 1998, 62)」

この場合、主節の‘I’は、従属節の経験的内容の信頼性に関するコミットメントを示す働き

[19] “I think I can see a bittern.”の自然な日本語訳は、おそらく「あそこに見えるのはサンカノゴイじゃないかな」あたりだろう。強いて「私」を使用して直訳風にしても、せいぜい「私はサンカノゴイが見えていると思う」か、あるいは「私に見えているのはサンカノゴイだと思う」くらいである。‘I’が明示的に重複する英語の構造は、英語または印欧語の特性に由来するものらしく、そのまま日本語に移そうとしてもうまく行かない。この一人称の重複の構造がデカルト的自我の主張の一つの機縁になっているというハレの見立てが正しいならば、この構造の成り立ちにくい言語を基盤にして考える場合、デカルト的自我とは何かを把握する手立てが一つ欠けることになる。デカルト的自我の主張は特定の言語（例えば印欧語）に依存する面や、或る文化（例えば近代ユダヤ＝キリスト教文化）に依存する面を備えているのである。ただし、だからといってデカルト的自我が文化依存的な信念の表明に過ぎないということではない。そして、デカルトのコギト論証が帰結する「私」の存在の疑いのなさは、論理的には、ヒトの自然誌と言語一般の前提である生きている身体の存在の疑いのなさに帰着すると考えられる。

を持っている。つまり、この主節の‘I’は、発話が道徳的世界に位置づけられるための指標として機能している（Harré, 1998, 62)。

例えば、「私は気持ちが悪くなりそうだ（I am going to be sick)」という発話は、端的に一つの予測と理解することができるし、場合によっては、脅しに聞こえることもあるかもしれない。いずれにせよ、この発話を従属節に埋め込んで、「私は気持ちが悪くなりそうだと〔私は〕思う（I think I'm going to be sick.)」や「私は確実に気持ちが悪くなりそうだと〔私は〕思う（I am sure I'm going to be sick.)」といった文を作ってみると、前者では予測ないし脅しの力が弱められており、後者では強められていることが分かる。従属節の‘I’は、吐き気が生じる身体の位置と、予測または脅しという発話の社会的力に関する話し手の道徳的な位置とを示す。そして、主節の‘I’は、埋め込まれた言明の力を修飾して、話し手の道徳的な位置だけを示す役割を果たしている。(Harré, 1998, 63；Muhlhausler and Harré, 1990, 100-101)

以上のようにして、「私にはサンカノゴイが見えていると〔私は〕思う（I think I can see a bittern.)」や、「私は気持ちが悪くなりそうだと〔私は〕思う（I think I'm going to be sick.)」のように「私」が重複して出現する文も、一人称表現の二重の指標性に立脚した分析を与えることによって、主語的存在者である「私」を導入することなく十分に理解できると考えられる。言い換えれば、一見、考える私が自分自身の心的状態を対象化して捉えているように見える自己意識の局面においても、指示対象として、“考える私であるところの実体”を導入する必要は無いのである[20]。

以上のメラーとハレの分析から得られる洞察は、次のようにまとめることができる。

（1）一人称の指標語は、生きている身体に備わっている動物としての自己把握を根底に持っている。一人称の指標語が結び付きを持つ（指示する）のは、何よりもまず、この生きている身体である。

（2）一人称の指標語は、或る発話の内容を、それを発話した身体に位置付け、その身体の位置において自然的世界および道徳的世界と結び付ける働きを持つ。

以下では、発達心理学の諸研究から、この洞察を裏付ける事実の報告を取り出してみたい。

3　5種類の自己知

アーリック・ナイサー（Ulric Neisser）の1988年の論文「5種類の自己知」は、発達心理学における自己認識の研究に、一つの準拠枠を与えた論文である[21]。本節では、まずナイサー1988

[20] デカルト的自我の主張が広く支持を集めてきた理由については、一人称の'文法'に関する誤解のほかに、キリスト教的な霊魂観や、プロテスタンティズムの倫理、所有する個人に立脚した政治・経済思想、といった思想史的状況が挙げられる。(Mühlhäusler and Harré, 1990, 102-103, 114-122)。

[21] ナイサーの提起した枠組みにもとづいて、以下の3冊の論文集が編まれている。
Neisser, U. (Ed.). (1993). *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-*

の提出した理論的枠組みの概要を、ナイサー 1997 の論点も補いつつ紹介する。4 節以下で、ナイサーの与えた枠組みの裏付けとなる実験報告を取り上げて、ナイサーの提起した自己認識の発達心理学的な構図の内容を検討することにしたい。

3．1　5 種類の自己

ナイサーは、自己認識をもたらす情報（information）の種類に着目する。異なった種類の情報は、自己の異なった側面を形成し、確立する。「これらの側面は別個であるから、これらは本質的には相互に異なるいろいろな自己（different *selves*）である。すなわち、これらの自己はその起源と発達的経過において異なっており、私たちの知識の点でも、また、これらのいろいろな自己が陥る病理の点でも、ヒトの社会的経験に貢献する仕方の点でも異なっている。(Neisser, 1988, 35)」

「情報」は多義的な概念だが、ナイサーは、二つの理解の仕方をとる。第一に、J．J．ギブソン（J. J. Gibson）の生態学的知覚論に由来する情報の客観主義的な理解、すなわち、情報を知覚対象の特性を規定する客観的実在と見なす理解である。第二は、より一般的な、脳内に蓄積されて思考や記憶といった心的操作の対象となる何かと見なす理解である。ナイサーは、自己論にはこの両方が必要になると考えている。自己は知覚的に取り出され、同時に記憶や内省によって構成される複合的な形成過程を持つからである。(Neisser, 1988, 35, n.1)

ナイサーの 5 種類の自己とは、生態学的自己（the ecological self)、間人物的自己（the interpersonal self)、延長した自己（the extended self)、私秘的自己（the private self)、概念的自己（the conceptual self）の 5 種である。これらは、それぞれ形成の時期は異なるが、すべてヒトの生涯の早期に出現する。(Neisser, 1988, 36)

第一に、生態学的自己とは、物理的環境に相対的に知覚される自己のことである。すなわち、私は今ここにいて特定の活動をしている、という形で行住坐臥つねに把握されている自己である。誕生直後から何らかの形でこのような自己把握は成り立っていると考えられる。

この生態学的自己は、自己受容感覚（proprioception）の情報を通じて把握される。自己受容感覚とは、身体の傾きや移動、四肢の位置と運動といった自己の身体の状態を捉える感覚を言う。伝統的には、筋肉の緊張や関節の曲がり角の受容器、内耳前庭の平衡感覚器官など、もっぱら特定の受容器が自己の身体の情報をもたらすと考えられてきた。しかし、J．J．ギブソンによって、視覚や聴覚などの典型的な外界受容感覚（exteroception）が、実は外界と自己の身体との相関性を告知しており、自己の身体の認知と制御に直接的に貢献しているという見方が提唱され、

knowledge. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
Neisser, U. and Fivush, R. (Eds.). (1994). *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
Neisser, U. and Jopling, D. A. (Eds.). (1997). *The conceptual self in context: Culture, experience, self-understanding*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

自己受容感覚を特定の受容器のみに結びつけない考え方が可能になった（Gibson, 1966, 33-39)。

ナイサーが重視するのも、ギブソン的な意味での自己受容感覚である（Neisser, 1988, 37-39；Neisser, 1997, 20-24)。例えば、視野の光学的流れは、自己身体の移動の情報として捉えられる。やっと立てる程度の幼児を直立させて、足が置かれた床面は動かさず、幼児の周囲の壁面だけを、幼児にとって前または後ろに素早く移動させる実験を行なうと、幼児はこの光学的流れの情報に惑わされて身体の直立を保つために自動的に反応し、かえってバランスを失って倒れてしまう（Lee and Aronson, 1974)[22]。この実験が示すように、視覚情報は同時に自己身体の姿勢制御に関する情報にもなっている。外界の知覚はそのまま自己の身体の知覚でもある。このようにして把握されるのが、生態学的自己である。

生態学的自己は、生物学的身体と重なるが、これと同じではない。例えば、義肢の装着に熟練すると、義肢は自己の一部と感じられるようになる。衣服は、生物学的には自分の身体ではないが、衣服表面に触れられることは、私に触れられることである。この私は、生態学的自己である。「問題となっているのは、所有や接触ではない。行為者性と運動の同調性なのである。(Neisser, 1988, 39)」

第二に、間人物的自己とは、情動的結び付きやコミュニケーションに関わる信号によって規定される自己のことである。すなわち、私は今ここにいて特定の人間的相互交渉にたずさわっている、という形で把握される自己である。これも幼児の発達の非常に早期に、生態学的自己と同時に出現する。

間人物的自己は、相互交渉の相手となった同種の他の個体の行動の情報にもとづいて、直接的に把握される。すなわち、他の個体の行動の本性、方向、タイミング、強度と、自己の行動の本性、方向、タイミング、強度とが相互的・相補的に規定し合うことによって、相互主観的（intersubjective）な存在として自己が知覚される。他の個体の行動の認知とそれに呼応する自己の行動は、自己のあり方の相互規定的な産出である。この意味において、ヒトを相手にしたコミュニケーション行動はそのまま自己の認知となる。(Neisser, 1988, 41)。

この場合、注意すべきことは、この水準での相互交渉は、自分の心の中の思念を伝えたり相手の心の中を捉えたりすることではない、という点である。この相互交渉は、人々の外部に現れた活動状態の水準において、ただちに成立する。従って、間人物的自己は心の内面性とは別物であり、端的に言えば、「社会的な接触のただ中にあってそれに気づいている生きた身体（person[23]）(Neisser, 1997, 27)」であるにとどまる。

第三に、延長した自己とは、個人的な記憶と将来的見通しに基づく自己のことである。すなわ

[22] リーとアロンソンの実験の詳細は４．１で扱う。

[23] “person”は、OED によれば、“The actual self or being of a man or woman: individual personality”、“An individual human being”、“The living body of a human being”のいずれをも意味しうる。「人格（personality)」概念とはっきり区別するために、また日本語の「人物」が人格概念を連想させるゆえに、ここではあえて「生きた身体」と訳出しておく。

ち、私は特定の経験を持っていて、一定の日常的活動に今後も継続的に従事する人物である、という形で把握される自己である。

延長した自己は、記憶のもたらす情報を通じて形成される。記憶は、今ではない別の機会に自分が行なったり経験したりした何かを再び取り上げることであるが、その何かをどうやるのか憶えているという形式の記憶（手続き記憶）ではなく、自分がそれをしたことを憶えているという形式の記憶において、はじめて自己が現在の瞬間を超えているという把握が可能になる。従って、記憶の諸形式のうち、延長した自己の形成に関与するのは、スクリプト記憶とエピソード記憶である。

幼児は2歳頃には起床、着衣、食事といった日常生活のルーチンを実行できるようになる。スクリプト記憶の成立は、現時点では実行していないルーチンを憶えているということによって確認される。例えば、クッキーを作るにはどうするのか言えるようになるということである。このような記憶は3歳頃に成立してくる。また、エピソード記憶は、クッキーを作ったのは自分だ、という形式の記憶である。エピソード記憶の成立はおそらく3歳を過ぎてからとされている。(Neisser, 1988, 47-48)

第四に、私秘的自己とは、自分の経験の幾つかが他人と直接的には共有できないことに子供が気づいた時に出現する自己である。例えば、私はこの痛みを感じることのできる唯一の人物である、といった形で把握される自己のことである。(Neisser, 1988, 36)

ナイサーは、「5歳前に、子供は心的生活の私秘性（the privacy of mental life）に気づく(Neisser, 1988, 50)」とするが、私秘的自己がどのような情報にもとづくのかという問いには答えていない。意識の私秘性は、記憶内容が過去（延長した自己）を告知したり、視覚経験が外界と自己身体の相関性（生態学的自己）を告知したりするのと同じ意味において、何かを告知する情報の一形式と結び付くとは言いにくいからである（Neisser, 1988, 50, n.15)。

自己の私秘性の認知は、ナイサー1988以降に蓄積された心の理論の獲得に関する研究を参照すれば、或る特定の情報形式によって幼児に与えられるというよりも、自分と他人の行為や発話を解釈する枠組みとして、4歳を過ぎる頃から徐々に形成されて行くと考える方がよさそうである。自分は世界をこのように（正しく）認識しているが、他人は別の（誤った）仕方で認識していて、その結果、他人は或る状況下で不適切な行動を取るはずだ、といった予測ができるようになるためには、子供は他人と自分の心的内容の共通性と相違性について的確に理解できていなければならない。この理解ができるかどうかは、一言で言えば、それぞれの人物は共通の世界を違うパースペクティヴから見ている、という解釈枠組みが組み立てられるかどうかによる。この解釈枠組みが心の理論である。しかし、どのような情報処理メカニズムの発達がこの解釈枠組みを形成しているのかについて、現状では専門家の間で意見の一致が無い[24]。

第五に、概念的自己とは、社会的役割や、科学や宗教の教説や、知力・資産といった重要な個人的属性などから成る概念のネットワークによって意味を与えられる自己である。日常的には、

自分はこれこれこういう人物だ、という形で把握される自己のことである。また、自己を思考する非物質的な魂として捉えるというデカルトの立場は、概念的自己のあり方の一例になる。「自己概念は、社会生活に起源を持っており、従って、社会や文化が異なるのに応じて自己概念は非常に大きく異なったものとなっている。(Neisser, 1988, 52)」ナイサーは、この概念的自己を与える情報形式について特に語っていないが、おそらく、人間と社会に関し言語化されて流通している或る文化の全情報が、自分とは何ものかについての理解に関わっている。

3．2　5種類の自己の関係

ナイサーは、これらの諸自己が切り離された別個のものとして経験されるわけではない点に注意する。通常、私たちが自己の統合の感覚を見失うことはまず起こらない。私たちは、環境の中で生き延びつつ、人々との社会的な関わりを維持し、過去を振り返っては将来を予期し、他人の心は測りがたいと考えながら、文化的に規定された自己の存在の意義を維持しようとする。

生態学的自己と間人物的自己とは、ほとんど常に同時的に気づかれている。例えば、あなたが話しかけている相手である私は、ここにいて今この環境を知覚している私である、ということが見失われることはまず起こらない。(Neisser, 1988, 46)

延長した自己は、主としてエピソード記憶の積み重なった自伝的記憶によって形成される。自伝的な語りは、両親から幼児に向けて、共有の過去や計画中の未来について語られる過程を通じて習得される。従って、延長した自己が間人物的自己、すなわち、原初的な対人的相互作用によって規定される自己を前提としていることは自明である（Neisser, 1988, 48)。また、延長した自己は、生態学的自己とも結び付いている。想起する自分と環境を知覚する自分との分離は、通常生じない（Neisser, 1988, 49)。

私秘的自己は、今自分が行なっていることへの明示的な気づきという形式においては、現実の状況から離脱しない（Neisser, 1988, 55)。従って、私秘的自己は、生態学的自己と間人物的自己と延長した自己の3者が合体した身体の状態と、別個に成り立つわけではない。ただし、夢や脱魂体験などでは、私秘的に体験される自己と、自己の身体や記憶などが分離することが起こりうる。その意味では、私秘的経験は、環境に埋め込まれた身体（生態学的自己と間人物的自己）から本質的に独立である。ただし、もちろん物質としての脳から独立なわけではない（Neisser,

[24] 「心の理論」問題の現状については、Nichols and Stich, 2003を参照のこと。心の理論に関連する実験報告は厖大な数に上っているが、フリをすること、他者の心を読むこと、自己を把握すること、という3つの主要課題の遂行能力を成り立たせている認知メカニズムについては、モジュール説、理論説、シミュレーション説等、仮説が幾つか提出される段階にとどまっている。ニコルスとスティッチは、この3つの仮説的メカニズムを課題の処理過程に即して適宜組み合わせる形の認知メカニズムを提唱する。ちなみに、「心の理論」問題とは、要するに、或る状況下で言語と行為を媒介にして他者および自己の心の内容が認識されるのはどのようなメカニズムによってなのか、という問題である。この問題の全容解明が間近いとは思われない。

1988, 51)。

概念的自己は、意識的な自己認知であって、それ以外の 4 種の自己知を、概念としてすべて取り込むことが可能である。すなわち、「典型的には、私たちの自己概念は、自分の身体についての観念を含んでおり、また、対人的なコミュニケーションについて、自分が過去にどんな種類のことを行なったかについて、将来何をするのかについて、とりわけ自分自身の思考と感情の意味について、諸々の観念を含んでいる。(Neisser, 1988, 54)」また、例えば、夢や脱魂体験のような特異な私秘的経験を日常の自己理解に結び付けるための文化的な理論も、概念的な自己の一部として用意されている (Neisser, 1988, 55)。

3．3　ナイサーの説の批判と評価

ナイサーの説の大きな特徴は、発達の最初期において、自己は知覚される存在者として始まるとするとらえ方にある。ナイサーによれば、西洋の哲学者は、知覚ではなく反省的意識の対象である私秘的自己を、知るに値する唯一の自己として特別扱いしてきた。その典型は、私秘的自己を確実に知ることのできる唯一の自己であるとしたデカルトである。しかし、「生態学的自己と間人物的自己は人生の最初から効果的かつ確実に知覚されている (Neisser, 1988, 51)」のであるから、私秘的自己とその経験を、あらゆる認識に優先するものとして認識論的に特別視するのは当たらない。

ナイサーの枠組みの一部は、第 2 節で見たメラーとハレの一人称の分析に当てはめることができる。生態学的自己は、メラーにもハレにも見出された動物としてのヒトの身体的自己把握にほぼ該当する[25]。他方、間人物的自己は、ハレの言う一人称の使用における社会的環境への位置取り、ないし道徳的世界における指標性の、最初の発現形態になっていると考えられる。従って、前言語的に成立する自己認識を基盤にして一人称表現の指示作用を理解するためには、生態学的自己と間人物的自己を詳しく調べることが有益なはずである。

また、延長した自己は、第 1 節で挙げた哲学的な自己認識に関わる第二の問題、すなわち、ロック以来の、記憶による自己の人格同一性の形成メカニズムを明らかにする問題に関わりが深い。例えば、キャサリン・ネルソン (Katherine Nelson) は、発達心理学の実験と観察にもとづいて、この問題に関する詳細な検討を行なった (Nelson, 1996, chs.5-7, esp. ch.6；Nelson, 2003)。ネルソンの考え方の概略を、記憶と人格同一性の問題への心理学的なアプローチの実例として概括的に紹介しておく。

ネルソンによれば、言語を前提しない乳幼児期の記憶システムは、生物学的 (進化的) に適応

[25] 通常、話し手は自覚的な自己認識を常に保持しており、一人称の使用においてもこれは変わらない。しかし、生態学的自己の段階の新生児は、自己を対象化して認識してはいない。従って、一人称の使用の根底にある身体的自己把握は、生態学的自己とまったく同一ではないと思われる。言語習得の前提になる最小限の自己の対象化のあり方については、5．3 で扱う。

的な価値を持つ「自分と他人を含み、時間的かつ因果的に配列された〔ルーチン的な〕出来事系列を心の中に保有する能力（Nelson, 1996, 173)」であると考えられる。他方、幼児が言語を習得することは、自分の直接的な体験の範囲を越える想像上の経験という領域が獲得されることを意味する（Nelson, 2003, 16)。そこで、言語習得と並行して記憶システムと他者理解のシステムが変容をこうむる。幼児は、4歳から4歳半頃に、過去における個人的経験への「自己知をともなった言及（autonoetic reference）（Nelson, 2003, 24)」ができるようになり、かつ、人々がそれぞれ相異なる記憶と知覚からなる表象的世界像を有することが了解できるようになる（Nelson, 2003, 18)。エピソード記憶と心の理論を手に入れるのである。同時に、幼児は、大人との会話を通じて、「一貫したストーリーを語ること。真実を語ること。事実を正しく捉えること。概括的〔スクリプト的〕な記憶システムでは重要でない〈いつ〉〈どこで〉〈なぜ〉といった要素を重要視して記憶すること。自分だけでなく他人にとって興味深い部分を強調すること。自分にしか意義のない部分は強調しないこと。（Nelson, 1996, 178)」といった語りの作法を学ぶ。こうして他者と効果的に記憶を共有できるようになり、大人との共同作業の中で自伝的記憶（the autobiographical memory）が形成される。「この自己の歴史の確立が、自己理解と長続きする自己概念との源泉として役に立つ（Nelson, 1996, 179)」のである。

このように、2歳過ぎから6歳頃までの発達を経て、現在の活動状態を越えた恒久的な存在者として自己を捉える表象的（representational）で物語り的（narrative）な自己理解が形成される。この自己理解の上に、文化的に規定された自我の理想像が学び取られ、その理想像に沿って自伝的記憶を整理・再構成し続けることを通じて、文化的自己理解が積み上げられる（Nelson, 2003)。

記憶と人格同一性に関わる従来の哲学的分析とネルソンの説明との大きな相違点は、哲学的分析が個体の心的状態の分析に傾く[26]のに対し、ネルソンの説明が、記憶にもとづく人格同一性の形成が本質的に社会的な構成過程を経ることを明快に指摘する点である。本論文はこの記憶と人格同一性に関わる問題には立ち入らないが、記憶の諸形態の経験的研究が自己概念の哲学的な分析に貢献しうることは明らかである。

一方、ナイサーの私秘的自己と概念的自己についての考察には、問題点が散見される。第一に、ナイサー自身が自己知の分類手がかりと見なす特定の情報形式との対応付けは、この2つのいずれについても明瞭ではない。心の私秘性や文化的自己概念が、言語の働きと密接不可分であることは明らかと思われる。だが、言語使用に関連する情報全体のどの部分が、これらの自己概念の形成に直接または間接に寄与しているのか、突き止めることはできていない。

第二に、私秘的自己と、自然的および社会的環境の中で時間を貫いて同一性を保ちながら生きている身体（生態学的自己＋間人物的自己＋延長した自己）との関係は、必ずしも判明ではない。

[26] 例えば、Shoemaker, 1959 において、他者の証言が自分の記憶言明の真偽を吟味する証拠として言及されるのは、分析の最後の最後である。

私秘的自己と生きている身体の関係は、反省的意識と身体の関係にほかならない。これは哲学的にはデカルト以来の心身問題である。夢や空想という私秘的表象の世界は、人物が置かれた現実の状況から自在に離脱できる。だが、だからといって私秘的自己は身体的基盤（物質としての脳）から独立ではないだろう。また、心身問題は、人々がそれぞれ客観的実在とは別の表象的な世界像を持っている、という「心の理論」問題の本質とも関連している[27]。心身問題も「心の理論」問題も全容解明が近いとは思われないから、これはナイサー説に固有の欠陥とは言えないのだが、私秘的自己と身体の関係がナイサーにおいて十分に明快でないことは事実である。

ナイサーの説の全体的な構図については、マイケル・ルイス（Michael Lewis）が次のような異論を提出した。ルイスは、まず「知っているということを知る能力や、憶えているということを憶えている自己の能力（Lewis, 1995, 110）」を客観的な自己意識（objective self-awareness）と呼び、「私たちが自己意識と言うとき指示しているのは、この心的状態である（Lewis, 1995, 110）」と指摘する。そして、「“私”という観念に結び付いたこの心的状態を持つ能力が……他のほとんどの生き物からヒトを区別するもの（Lewis, 1995, 104）」なのであるから、「自己（self）という言葉は、〔この〕特定の心的状態のためにとっておく（Lewis, 1997, 279）」方がよいと提唱する。

ルイスによれば、生態学的自己や間人物的自己は、自然環境や同種の他の個体との交渉における自他識別と自己統御の能力の保有を意味するのみである（Lewis, 1995, 104）。これらはヒト以外の生物にも十分ありうるから、この段階の存在を「自己」とは呼ばない方がよい。というのも、特に臨床心理学の分野において、概念的自己の段階で初めて成立する反省的で概念的な思考の能力を、生態学的自己や間人物的自己の段階にある乳幼児に不用意に帰属させる誤りが頻繁に見られるからである（Lewis, 1995, 106-109；Lewis, 1997）。[28]

ルイスが取り上げている問題は、ナイサーの枠組みで言えば、エピソード記憶と心の理論と概念的思考を獲得した段階の認知活動と、生態学的自己及び間人物的自己の段階との区別である。

---

[27] 例えば、クオリアは、物理的実在とは別の現象的な対象として導入され、心身問題の物理主義的解決を阻む拠点の一つとなってきた（Van Gulick, 1997；Nida-Rümelin, 2002；Tye, 2003）。そして、クオリアを導入するためのジャクソンの思考実験は、“他者の経験の内なる現象的対象”という設定と本質的に結びついている（Jackson, 1982；Jackson, 1986）。一方、心の理論は、他者の経験と自分自身の経験の共通性と相違性に関する思考の枠組みである。クオリア問題も「心の理論」問題も、自己と他者の心的世界の区別という同型の問題に関わっている。心身問題と「心の理論」問題に関連性があることは明らかである。クオリア論が指摘する心身問題の難問は、ヒトの「心」という装置の本質的な社会性に、その根本的な起源があるのかもしれない。言い換えれば、問われているのは、心の非物質性ではなくて、身体（脳）という物質の機能の本質的な社会性なのかもしれない。

[28] この誤りの例として、母親から愛情を注がれている乳児に、〈お母さんは私を愛して理解している〉とか〈私は愛され理解される能力を持っている〉といった心的状態を帰属させてしまう記述の例が挙げられている。このような心的状態は対象化された「私」の概念を要請する。乳児に対象化された「私」の認知を帰属させることは無理だろう。だから、このような心的状態を幼児に帰属させるのは誤りなのである。（Lewis, 1997, 281）

ルイスは、反省的な思考を通じて獲得される心的状態と、環境中での自他識別や自己統御に関わる認知的諸能力に本質的な違いがあると見ている。

例えば、母親と生後数カ月の幼児との情動的コミュニケーションのパターンは、間人物的自己の典型的な現象形態と見なされている。だが、これは片方が微笑んだらもう一方も微笑む、といった社会的伝染の一種でありうる。その意味では、1羽が飛び立ったら電線に留まっているすべての鳥が飛び立つ、といった現象と本質的な違いはない。「このような定義の下では、相互主観性とは、ある行動が引き金となって起こる一連の複雑な行動パターンである。……〔この場合の〕相互主観性は、手段と表象の複合からなる意図に基づいているのではなく、むしろ自動的な社会的反応に似ている。(Lewis, 1997, 282)」

このようなコミュニケーションと、何らかの反省的意識が介在した意図的なコミュニケーションとは区別されねばならない[29]。反省的意識がもたらす「自己の概念(the concept of self)は、一個の観念、私にとって特別に強力な心的状態である。……私の心的な諸状態の多くからなるネットワークのかなりの部分が中心を置いているのは、この観念(Lewis, 1995, 103)」である。結局、ルイスにおいては、この自己の概念を持つか持たないかによって、ヒトとそれ以外の動物が区別され、成人と乳幼児が区別されていることになる。

言葉遣いに対するルイスの注意はそれなりに傾聴に値する。だが、自己の概念を規準に取って、真に人間的な自己認識と、生きている身体の機能としての自己把握とを峻別する方針は、受け入れられない。反省的な思考によって取り出された心的状態や自己の概念の方を自明視して、これを生きている身体から切り離すことは、デカルト主義への復帰である。

コギト論証が証明する存在者を一人称の使用と結びつけて理解する私たちの方法は、むしろ、反省的思考を、生きている身体から生み出される活動として捉えようとするものである。対象化された「私」を生態学的自己や間人物的自己に不用意に帰属させてはならない、というルイスの注意は厳格に守られなくてはならない。だが、この注意は、反省的な自己認識と生きている身体とを切り離す方向で生かすべきでなく、橋渡しする方向で生かすべきである。言い換えれば、生態学的自己や間人物的自己から対象化された「私」が生み出される局面を捉えることが、私たちの課題となるべきなのである。この点に留意しつつ、次節では、生態学的自己と間人物的自己のあり方を少し詳しく見てみよう。

4 環境に埋め込まれた身体

本節では、生態学的自己と間人物的自己の実在性を浮かび上がらせる実験報告を幾つか取り上げ、これらの自己の実在性と対象化された「私」との関わりを検討する。

[29] ナイサーももちろんこの2つを区別している。本論文44頁のNeisser, 1997, 27の引用を見よ。

4．1　身体制御と自己受容感覚　――生態学的自己の一側面――

既に述べたように、J．J．ギブソンは、自己受容感覚を特定の受容器に結び付ける見方をしりぞけ、動物は、見、聴き、触れ、嗅ぎ、味わう外界受容感覚のすべてを通じて、自分自身への刺激を作り出していると考えた（Gibson, 1964 [1982], 165)。自己受容感覚は一種のフィードバック現象なのである。「運動の統御は視覚に依存し、手作業の統御は眼と関節と皮膚感覚に依存し、発話の統御は耳に依存する。(Gibson, 1964 [1982], 165)」自己の身体の運動や静止が外界受容感覚への刺激を作り出す。その刺激の外界受容感覚からの入力が自己の身体の統御のための自己受容的な情報となり、その統御の結果がさらに外界受容感覚への新たな刺激を作り出す。ここには「反応から刺激へ、そしてまた反応へというループが存在する。この結果は、それぞれ別個な反射の連鎖ではなく、活動の連続的な流れになるだろう。(Gibson, 1966, 31)」これは動物が環境の中で行動するときに常に生じていることである。そして、この情報の流れのカナメには一個の生きて動いている身体が位置している。私たちの発話に出現する一人称表現は、発話内容（世界の記述や種々の言語行為）とこの生きている身体との結び付きを表出している。

ナイサーは、ギブソンのこの生態学的な知覚論の立場を取り入れて、「或る対象が手の届くところにあるのを見ることは、私の手の長さと私の体幹の柔軟性を条件として、その対象が私の手の届くところにあるのを見る（Neisser, 1997, 24. 強調は原文)」ことにほかならないと指摘する。私たちの知覚的認知は、常に、自分の身体と環境世界との相関性の知覚である。私たちの身体的自己把握の出発点も、私たちの環境認知の中にある。

ナイサーが典型的な事例として挙げているのは、環境を観察する視点が身体移動によって動くときの視野の光学的な流れの情報である。例えば、壁のような一様に広がった平面に観察者が接近してゆくと、単一の中心点から外側に向かう光学的な流れが生じる。この流れは、自己の身体の将来の空間的位置（自分がどこへ向かっているのか）を予測することを可能にしている。この流れが急速であれば、衝突が差し迫っていることが分かる。また、広がった表面に対して観察者が平行移動するときの光学的な流れは、自己の身体の移動の経験を与える。だから、駅に停車中の列車の窓から隣の線路の列車が発車するのを見ると、自分が動いている感覚が生じることがよくある。(Neisser, 1988, 37-38)

幼児が光学的流れの視覚情報を自己受容感覚として利用して身体姿勢の制御を行なっている事実は、リーとアロンソンによって立証された。リーとアロンソンは、発泡スチロールで底抜けの大きな箱を作って、その箱を実験室の不動の床面上を滑り動く〈部屋〉として使い、不動の床面上で静止した被験者に対し周囲の〈部屋〉の壁が前後に滑り動いて光学的な流れの情報を作り出す実験装置を考案した。

この〈可動部屋〉は奥行き3．6メートル、間口1．8メートル、高さ2メートルの直方体で、天井はあるが床は無く、手前入り口側の間口の壁は外してある。この〈部屋〉を実験室の床からわずかに浮かせて実験室の天井から吊し、長手方向に47センチずつ計94センチの振幅で動かせ

るように設定する。この〈部屋〉の中央に、奥の間口側壁面に正対する形で 13 月齢から 16 月齢の幼児を立たせ、〈部屋〉を前後に動かすのである。正対する壁面が幼児から遠ざかるように、すなわち、幼児に対して視野左右の壁面が前方に移動するように〈部屋〉を動かすと、幼児は前のめりに身体が動き、少なからぬ人数がよろめいて倒れた。逆に、後ろ方向に〈部屋〉を動かすと、幼児はのけぞって後ろ向きに倒れた。〈部屋〉を前方に動かした場合には、被験者の視野には自分の身体が後方に移動しているときの光学的流れが生じる。すると、後方への身体運動を補正するため、前方へ動くよう筋肉・関節系が反応し、前によろめいたり、甚だしい場合は倒れてしまったりすると考えられる。〈部屋〉を後方に動かせば、反応はちょうど逆になる。(Lee and Aronson, 1974)

リーとリシュマンによって、成人を被験者とした場合にも、基本的に同じ反応が得られることが確かめられた。成人は単なる〈可動部屋〉実験では目立った反応が出にくいため、普通に直立する姿勢の他に、爪先上がりの斜面に立つ、ぐらぐらするクッションの上に立つ、爪先立ちする、土踏まずで横木の上に立つ、踵をくっつけて爪先を左右に 180 度開いて立つ、片手にもった荷物を突き出して片足で立つ、などといった制御の困難な姿勢を取らせた上で、視覚情報の方も、眼を開ける／閉じる、遠くを見る／近くのものを見る、といった仕方で統制して実験が行なわれた。その結果、成人の場合にも、視覚が姿勢制御システムのための自己受容感覚の情報として重要な意義を持つことが確かめられた。(Lee and Lishman, 1975)

バターワースとヒックスは、まだ立てない 10 月齢児を被験者として〈可動部屋〉実験を行ない、座った姿勢でも被験者に〈部屋〉の移動方向に沿った頭や上体の揺れが生じることを確かめた（Butterworth and Hicks, 1977)。この実験結果は、自己の身体を認知する視覚的自己受容感覚が、直立姿勢を学ぶ以前に、直立姿勢とは独立に成立している事実を示している。さらに、2 月齢児でも、〈可動部屋〉のもたらす光学的流れの情報に合わせて自分の頭を動かす反応が存在することが確認されている（Butterworth, 1990, 124；Butterworth, 1995, 94)。

興味深いのは、非常に幼い幼児は、ハイハイが出来るようになると、不動の床面と合致しない壁面の光学的流れ情報への反応強度が減少する（つまり、〈可動部屋〉がもたらす紛らわしい情報に動かされにくくなる）という事実である。身体の新しい運動能力が外界と自己の相関性についての新しい情報をもたらし、それによって自己の身体の制御システムも作り替えられると考えられる（Butterworth, 1990, 125)。

各種の実験から、光学的な流れに対する視覚の自己受容感覚的な感受性（視覚による姿勢制御能力）がヒトの生得的な能力らしいことが強く示唆されている（Butterworth, 1990, 124；Butterworth, 1995, 94-95[30])。だが、これは古典的な意味での反射過程ではないとバターワースは主張する。「光学的な流れのパターンは、姿勢の安定性が失われるのを告知することを通じて、行動を訂正する動機を供与している。そして、うまく制御された姿勢がいつ達成されるのかをそれが規定しているという点で、光学的な流れのパターンは目的指向的（goal directed）にでき

ているのである。(Butterworth, 1990, 127)」つまり、光学的流れのパターンに基づく視覚の自己受容感覚は、たんなる反射ではなく、運動にともなう自己の身体の制御をうまくやってのけるための目的指向的な活動であって、生きて動いている身体の、時々刻々変化する動的かつ原初的な自己認識と見なしうると言うのである。

自己受容感覚は、もちろん、視覚系や聴覚系ばかりでなく、筋肉の緊張を検出する筋肉系の受容器や、関節の曲がり角の受容器、内耳前庭系の平衡感覚器、その他、物体との接触や圧迫、摩擦などによる身体の変形を検出する皮膚系から、身体の一般的恒常性（homeostasis）にかかわる内臓系の情報まで多種多様な感覚が挙げられる（Gibson, 1966, 37；Eilan, N., Marcel, A. and Bermúdez, L., 1995, 13)。内臓系の漠然とした不快感も自己受容感覚の一つである。その意味で「ボク吐きそう！」という発話が自己認識であることに間違いはない。だが、イヌも嘔吐はするが、「ボク吐きそう！」と吠えはしない。自己受容感覚による自己把握と、発話を通じたそれの表出との間には無視できない違いがある。

バターワースに対してG．G．ギャラップ・ジュニアは「すべてではないが、ほとんどの脊椎動物が、〔免疫系の〕細胞レベルの自己感受も主観的／自己受容感覚的な自己感覚も備えている。しかし、これらの能力があっても、それはその生き物が自分自身を注意の対象とすることが可能になる地点にまで到達していることを全く保証しない。(Gullup, Jr., G. G., 1992, 117)」と批判した。マイケル・ルイスのナイサー批判に即して確認しておいたように、自己受容感覚は自己の対象化をともなう自己認識とは基本的に別物である。従って、視覚的自己受容感覚による幼児の身体的自己把握は、たとえバターワースの言うとおり反射ではなく原初的な自己認識であるとしても、ヒトの自己認識の出発点（必要条件）を示す興味深い現象にすぎず、この出発点から「ボク吐きそう！」という一人称の発話が可能になる地点までの道程には、自己を対象化して認識する決定的な変化が含まれていることになる。

発話は対人コミュニケーションの一形態である。言語習得以前の非常に幼い幼児が、どのように周囲の同種の他の個体とコミュニケーションを行なっているのか、次に見ておこう。

4．2　乳幼児のコミュニケーション　――間人物的自己の一側面――

ヒトは、幼児の環境の重要な要素である。非常に幼い幼児でも、ヒトとそれ以外の対象をきちんと識別している。この識別能力の存在は、新生児が大人の表情を模倣するという事実によって劇的に立証された（Meltzoff and Moore, 1977；Meltzoff and Moore, 1983)。メルツォフとムアは[31]、生後 12 日から 21 日の幼児を対象とする実験を行ない、これほど幼い幼児でも大人の顔つきの模倣を行なう事実を発見した（Meltzoff and Moore, 1977)。さらに彼らは、生後 42

[30] バターワースらは生後 24 時間のニワトリのヒナで〈可動部屋〉実験を実施し、視覚的な流れが姿勢制御に利用されているという結果を得たそうである。(Butterworth, 1995, 94)

[31] メルツォフらの実験について詳しくは田村 2004 の 44-50 頁を見られたい。

分から 71 時間の新生児を対象にして同じ実験を行ない、まったくの新生児が大人の顔つきを模倣する事実を確認した（Meltzoff and Moore, 1983)。

メルツォフとムアの実験は、幼児の眼前で、特定の顔の動きを決まった間隔で決まった回数だけ実験者が提示してみせて、幼児の表情の動きを記録し、模倣と見なしうる動きの起こる頻度および持続時間を計測して分析する、という方法で行なわれた。実験者が提示した顔つきは、口を大きく開ける動きと、舌を大きく前に突き出す動きである[32]。実験の結果、幼児が口を大きく開ける現象は、実験者が口を開けてみせた後に、舌を突き出してみせた後よりも高い頻度で出現することが明らかになった。同様に、舌を突き出す現象も、実験者がその動きをしてみせた後に、幼児において高い頻度で出現した。(Meltzoff and Moore, 1983, 705-706)。新生児は、確かに他人の顔つきを模倣するのである。

まったくの新生児が大人の顔つきを模倣するという事実は、この能力が生得的なものであって、後天的な学習に依拠しないことを示している。しかしまた、2 種類の異なった顔つきが同じように模倣される事実は、顔つきの模倣が、固定した行動形式を特定の刺激が解発するという古典的な意味での生得的行動とは異なる、ということも示唆している（Meltzoff and Moore, 1977, 77；idem. 1983, 707；idem. 1994, 91ff；idem. 1995, 95)。

トレヴァーセンによれば、「新生児は、しばしば何秒間も相手を観察してじっと見ている。模倣をするときには、明らかに努力しており、少しずつモデルに近づけてゆく。(Trevarthen, 1993, 143)」つまり、新生児の模倣は、反射的な運動反応というよりは、意図的な行為に近いものなのである。模倣は他者への応答であるから、会話の原型のような相互性を備えている。だから、「生後わずか数時間の幼児が、自己と他者の心理的な統御に適応したコミュニケーション能力を表現することができる（Trevarthen and Aitken, 2001, 7)」と言ってもよい。新生児は同種の他の個体を環境中で識別できるだけではなく、それに応答する傾向を備えているのである。

新生児は、非常に早い時期に、母親を識別できるようになる。デ・カスパーとファイファーは、生後 3 日以内の新生児が、母親の声を聞き分けるだけでなく、他の女性の声よりも母親の声を好むという事実を確認した（DeCasper and Fifer, 1980)。また、新生児は、生後すぐ母親の顔を識別できるようになり、6 日までには母親の胸の匂いを他人の匂いよりも好むようになり、2 週間経つと、暗闇の中で沈黙したままでも、母親が抱き上げるときとそれ以外とを識別し、母親にはくつろいだ姿勢を取るようになる（Murray and Trevarthen, 1985, 180)。幼児は非常に早い時期から、ヒトと他の対象を識別できるだけでなく、ヒトの個体を識別している。そして、幼児は最も重要な個体である母親を相手にして、繊細なコミュニケーションを行なっている。

マレーとトレヴァーセンは、2 月齢児を被験者として、幼児と母親とのコミュニケーションの実態を確認する巧みな実験を行なった（Murray and Trevarthen, 1985)。彼らは、その実験に

[32] Meltzoff and Moore 1977 の実験 1 では、口をすぼめて突き出す動きと、指の動きの模倣行動も実験されている。だが、その後の実験ではこれらは取り上げられていない。

もとづいて、2月齢児と母親との間には、双方向的に情動を伝達し合う繊細で濃密なコミュニケーションが成り立っていると主張した（Murray and Trevarthen, 1985, 191-195)。とりわけ重要なことは、幼児は、或る時点での自分の身振りや表情の表出に対し、母親がまさにその身振りや表情に正確に呼応した応答を返してくるかどうか精密に識別している、という事実が確認されたことであった。2月齢の幼児は、母親がコミュニケーションの流れにうまく適合しない見当外れの反応を返してくると、苦痛を感じるようなのであった。幼児は、母親の笑顔が見えればいつでも満足するといった単純な感情反応の規則に従っているのではなくて、自分が行なった表出に呼応して適切なタイミングで適切な応答が返ってくることを期待しており、その期待が裏切られると苛立つように見えるのである。

ナイサーの間人物的自己の着想も、このマレーとトレヴァーセンの実験から多くを得ている。幼児は、一方では、自己の行動の可能性や制約を自然環境の中に知覚して、身体の運動や姿勢を制御し、生き延びる身体としての自己を時々刻々確立している。これが生態学的自己である。他方で、幼児は、たった2月齢で、母親との対人関係の中に自己の情動的表出の可能性や制約を知覚して、自己の表情や身振りを制御し、表出する身体としての自己を時々刻々確立している。これが間人物的自己なのである。

マレーとトレヴァーセンは2つの実験を実施した。第1実験は、母親との正常なコミュニケーションが中断されたときの幼児の反応を観察するものである。その中断には、自然な中断と不自然な中断の2種類が設定される。母親は、まず普段通り赤ちゃんに話しかけて通常のコミュニケーション状態を30秒間維持する。次に、そこに実験者が割って入り、母親に話しかける。母親は赤ちゃんから視線を反らし、実験者と30秒間話し合う。これが自然な中断パターンである。この中断の後、母親は再び赤ちゃんと通常のコミュニケーション状態に復帰する。続いて、実験者の指示によって、母親は赤ちゃんに全く応答せず無表情のまま45秒間赤ちゃんを見つめる。これが不自然な中断パターンである。最後に母親は赤ちゃんとの通常のコミュニケーション状態にもどって観察が終了する。(Murray and Trevarthen, 1985, 180-181)

被験者の反応は、注意の方向、コミュニケーションの努力、感情、活動性の水準、の4つのカテゴリーに分け、それぞれに細かな下位分類を設けて0.5秒単位で記録する。例えば、注意の方向のカテゴリーの下位区分は、赤ちゃんが（1）お母さんの方を見る、（2）お母さんから目を反らして部屋の中を見たり床を見たりする、（3）自分の手など身体部位を見る、（4）割って入ってきた人物を見る、の4つに分けられている。コミュニケーション努力のカテゴリーでは舌や口の動きが列挙されている。感情カテゴリーでは眉を上げたり笑ったりする肯定的反応と、顔をしかめたり泣いたりするといった苦痛を表す否定的反応、あくびをしたり指を吸ったりする転換的な否定的反応が列挙されている。活動性の水準のカテゴリーは、腕が肩の高さ以上に上がるかどうか、といった活動状態で判定される。(Murray and Trevarthen, 1985, 184)

実験に参加した6週齢から12週齢の幼児は、通常のコミュニケーション状態では、母親との

積極的な相互交渉が行なわれている状況における典型的な行動を提示した。母親の顔を見て、舌を突き出したり口を開いたりするコミュニケーション努力の動作を行ない、しばしば微笑み、苦痛を表す反応や転換的反応は示さなかった。(Murray and Trevarthen, 1985, 185)

第1回目の中断で実験者が割って入ると、視線が母親から反れたり、コミュニケーション努力を示す動作が減り、微笑んだり眉を上げたりする肯定的な感情表現もあまり見られなくなった。しかし、苦痛を表す反応は増加せず、くつろいだ状態は維持された。(Murray and Trevarthen, 1985, 186)

ところが第2回目の中断で、母親が無表情のまま停止すると、目立って異なる反応が生じてきた。顔をしかめ唇を歪めて苦痛を表し、また、服や顔を触る転換的な否定的反応も生じてくる。総じて否定的反応が増加すると同時に、コミュニケーション努力を示す動作は概して維持され、始めのうちは抗議するかのように強められもする。そのうち、幼児は母親を見る頻度、長さともに減り、コミュニケーションから退いた状態になる。(Murray and Trevarthen, 1985, 186)

このような結果から、3月齢に満たない幼児でも、感情と注意の組み合わせからなる複雑な表現様式を持っていて、母親の行動の形式と方向の変化に敏感に応じていることが分かる(Murray and Trevarthen, 1985, 188)。マレーとトレヴァーセンは、2月齢児と母親とのコミュニケーションを制約する条件をより詳しくとらえるため、もう一つの実験を行なった。

マレーとトレヴァーセンの第2実験は、幼児と母親をそれぞれ別室に入れ、テレビカメラとモニターとビデオレコーダーをそれぞれの部屋に据え、これらを回線で結んで、幼児と母親がモニター上の映像を通じて双方向にコミュニケーションできるよう設定して行なわれた。実験のカナメは、相互に映像が生中継されている状態での幼児の行動と、録画された母親の映像を見る状態での幼児の行動を、比較対照するところにある。まず、相手の反応が相互に生中継されている状態で、母親の行動をビデオに録画しておく。そして、この生中継の後に、それの録画された映像を被験者の幼児に見せ、その反応を観察する。幼児は、相互のコミュニケーションがうまく行っている状態と全く同一の母親の行動を見るのだが、しかし、録画された母親は幼児の表現に適切な反応を返してはくれない。生中継と録画の相違に幼児が反応するならば、幼児は、現在進行中のコミュニケーションの相互依存的な(contingent)構造に敏感に気づいていることになる。(Murray and Trevarthen, 1985, 182)

幼児は、生中継の間は、第1実験における通常のコミュニケーション状態と同様の反応を示した。微笑みの頻度は落ちるが、母親とのアイコンタクトは維持され、舌や唇の活動性は落ちず、腕を動かす活動性は高い。しかし、録画を見せられると、母親から視線が反れ、顔をしかめたり唇を歪めたりする苦痛の表情を示し、衣服や顔をいじる転換反応が出現する。そして、肯定的な感情表現も、コミュニケーション努力を示す動作も減少した(Murray and Trevarthen, 1985, 189)。

3月齢未満の幼児は、母親の楽しげな様子や親しげな話しかけに接しても、それが録画に過ぎ

ない場合、苦痛を感じ、注意が散漫になり、コミュニケーションから離脱する傾向を示す。幼児と母親の通常のコミュニケーションにおいては、現在進行中の相互の表現に応答することによって相互依存的なコミュニケーションが成立していると考えられる。ビデオ録画はその相互依存性を破壊してしまうので、幼児にとって苦痛が生じると推定される。[33]

これらの実験から、6週齢から12週齢の幼児が「母親の行動の構造的諸特徴（例えば、母親の視線の方向、表情、運動のリズム、声の質など）を探索する能力を備えていて（Murray and Trevarthen, 1985, 192)」、母親の行動の諸特徴に対して情動的な表出で応答しており、母親の方も、幼児の情動表出を的確に読み取って返答していることが分かる。実験上の必要から無表情の応対を強いられた母親は、その後すぐに赤ちゃんのご機嫌をとる行動を示す（Murray and Trevarthen, 1985, 193)。ヒトは非常に幼い頃から、周囲のヒトとコミュニケーションを積極的に行ない、自己を環境の中で望ましい状態に置く能力を発揮しているわけである。

しかし、コミュニケーションの存在は、必ずしも自分の伝達したい内容を幼児が自覚していることを意味しない。間人物的自己とは、「社会的な接触のただ中にあってそれに気づいている生きた身体（Neisser, 1997, 27)」なのであった。マイケル・ルイスによれば、生後3カ月から6カ月程度の幼児のコミュニケーション活動は、「心的状態を含んでいなくてもよいのであって、その代わりに、伝染もしくは注意の獲得と保持の単純な諸規則を示しているだけなのかもしれない。この〔母子コミュニケーション〕関係は、一方〔母親〕は複雑な心的状態を保有しているが、もう片方〔幼児〕は生物学的な諸能力しか保有していない2者関係の相互作用にすぎないかもしれないのである。(Lewis, 1997, 282)」

すなわち、2月齢の幼児は、たとえ繊細なコミュニケーション活動をしているとしても、依然として、環境の中で周囲と相互作用する身体という水準から離陸してはいないと見た方がよい。対象化された「私」が、幼児において、環境に埋め込まれた身体としての諸活動の中から生み出される局面は、依然、所在が探り当てられていない。

---

[33] マレーとトレヴァーセンの第2実験は、被験者が少数（4名）である上、追試における結果の再現性が低く、その主張に疑問が提示されて来た。最近でもロシャトらの追試では結果が再現されず（Rochat, Neisser and Marian, 1998)、ナデルらの追試では結果がよく再現されている（Nadel, Carchon, Kervella, Marcelli and Reselbrat-Plantey, 1999)。ナデルらの批判によると、ロシャトらの実験では、録画されたコミュニケーション状況が、実は幼児と母親が十分良好な相互依存性を達成している段階ではなかった可能性が残る、とのことである。ロシャトらの実験は、良好でないコミュニケーション状況における幼児の反応を、生中継と録画とで比較しただけなのかもしれない。この場合、生中継と録画とで大きな反応上の相違が出なくても不思議はない。ナデルらは、良好なコミュニケーション状況に母子が達したときにその状況を録画し、さらに、生中継と録画とがつなぎ目なしに連続する実験設定を構成してマレーとトレヴァーセンの結果を再現するのに成功した。一方、ロシャトらは2月齢児のコミュニケーション能力そのものには疑義を提出してはおらず、むしろ、ビデオモニターをリンクさせる実験方法が2月齢児には不適当なのではないか、という実験方法への疑義を提出しているにすぎない（Rochat, Neisser and Marian, 1998, 362, 365)。従って、本論文においては、マレーとトレヴァーセンの2月齢児のコミュニケーション能力に関する主張は、基本的に受容できるものと見なす。

5　共同注意と対象化された「私」

幼児が対象化された「私」の形成の方向へ一歩を踏み出すのは、母親の中に環境中の特定の対象に向かう特別な関心がある、ということに気づくことと関わりがある。大人が注意を向けている対象に幼児も注意を向ける現象は、共同注意（joint attention）と呼ばれる。共同注意は、大人の視線の変化や指差し行動に幼児が気づき、その方向に幼児自身も視線を向け、大人が何を見て（指差して）いるのか突き止める、という一連の行動である。これは幼児が他人と指示対象を共有する経験であり、言語習得に決定的な役割を果たしている。

5．1　視線追尾と言語習得

大人の視線の変化に幼児が気づき、その方向に視線を向ける、という現象にはじめて注目したのは、スカイフとブルーナーである（Scaife and Bruner, 1975）。彼らは、2月齢から14月齢の幼児34名を被験者として、比較的単純な手続きによって幼児の共同注意能力に関する基本的な事実を確認した。

スカイフとブルーナーの実験では、まず実験者は幼児と同じ視線の高さで約0.5メートル離れて正対し、アイコンタクトを維持する。それから沈黙したまま首を90度回して、実験室中の1.5メートル離れたところに隠して置いてある小さな光を7秒間だけ見る。それからまた首を元の位置に戻し幼児とアイコンタクトを再確立する。この動作を、右と左にそれぞれ1回ずつ、アイコンタクトの再確立に要する20秒から50秒の間隔を置いて、実行する。幼児の反応が視覚的共同注意と判定されるのは、幼児が（a）実験者に合わせて右または左を、（b）他の場所に視線をやることを途中に挟まずに、（c）7秒以内で、（d）何かを探すか見つめる様子をともなって（頭の回転が0.5秒以上停止し、四肢の動きが止まる）見るとき、である。（Scaife and Bruner, 1975, 265）

結果は単純明快であり、非常に興味深いものだった。2月齢から4月齢の幼児では30パーセントが共同注意と判定される反応を示した。肯定的反応の比率は、5月齢から7月齢では38.5パーセント、8月齢から10月齢では66.5パーセント、11月齢から14月齢では100パーセントになった。

スカイフとブルーナーの実験では、視線の動き（両眼の動き）だけではなく、頭の動きという身体姿勢の手がかりが大幅に含まれているが、幼児は、わずか2月齢から4月齢でも他人が目（頭）を向ける方向に自分も目を向ける傾向を備えている。この視覚的共同注意の能力は月齢に応じて高くなり、1歳頃には全員が他人の注意の方向に敏感に反応するのである。

1975年当時、この結果はピアジェの提唱した幼児の自己中心性の説を反駁するものと考えられた（Scaife and Bruner, 1975, 266；Bruner, 1983, 74）。他人の視点というものが世の中にあることに幼児が気づいていないというのが本当なら、視覚的共同注意という現象は生じないだ

ろうからである。そして、ブルーナーは、この発見を、母子関係の観察と種々の実験報告にもとづいて、言語習得における指示の発達の説明に組み込んだ。

子供は2月齢でアイコンタクトができるようになり、発声もそれにともなうようになる。この頃やっと赤ちゃんが人間らしくなってきたと母親は感じるのだが、この時期以降、母親は、適当な品物を取り上げて、自分と赤ちゃんの共同注意のターゲットを設定する行動を始める。アイコンタクトを保ちながら、自分と赤ちゃんの間に品物を持ってくるか、或いは、赤ちゃんが先だって注意を向けている対象を取り上げて動かしてみせる。(Bruner, 1983, 70-71)

このとき、母親は、特徴的な上昇イントネーションで呼びかける。この上昇イントネーションの呼びかけは、赤ちゃんが言語を理解できないこの段階で、むしろ極めて多い。この時期には、「言語は、ものに注意を向けたりものを扱ったりすることにともなって存在し、また、行動の可能性が広がるのに同調している。この段階での発声は、後にものを手で扱いながら言語が用いられるときのための“場所を確保する仕掛け(place-holder)”である。(Bruner, 1983, 71)」

赤ちゃんは、母親が手にものを持ってこの素早く上昇する強勢イントネーションを発すると、自分の注意の焦点を母親が持っているものに振り向ける傾向が強い。この特徴的な音声は、ヒトの幼児にとって不確定の何かを指し示す原始的な指示表現であるらしい。共同注意の最初の局面は、こうしてほとんど母親の制御下にある。「この最初の局面は、“見るべき何ものか”に母親が注意を向けていることを示す信号を、子供が母親の発話の中に見出す、という結果をもたらす。7カ月で、子供はこの“未分化の指示表現(undifferentiated deictics)”を感受できる段階に到達するようである。(Bruner, 1983,73)」

同じ頃に、幼児は、大人の視線を追って、何が他人の注意を引いているのか発見しようとする段階に至る。先のスカイフとブルーナーの実験によれば、視覚的共同注意を構成する視線追尾とターゲットの発見は、8月齢から10月齢で3分の2が、12月齢で全員ができるようになる。12月齢頃になると、幼児はターゲットが見つからないと大人に視線を戻し、どちらを向けばよいのかさらに探求するようになる。こうして、対象に向かう注意の統制が、未分化な指示表現よりも進んだ仕方で行なわれるようになる。(Bruner, 1983, 74)。

他方、幼児は6月齢から7月齢頃までに、手を伸ばしてものを取ろうとしたり、取ったものを交換しようとしたりするようになる。「この能動的な時期の主たる達成は、子供が欲求対象を示す信号の発し手になるということである。子供は、自分の注意を他人が引きつけようとするのを理解したり解読したりすることに、ただ巻き込まれているだけではなくなる。(Bruner, 1983, 75)」つまり、幼児は、共同注意現象が生じる頃には、環境世界に対する彼らなりの能動性を行動において示し始めている。

こうして、9月齢過ぎから12月齢頃に、指差し(pointing)という決定的な行動様式が出現する。指差しは、視覚的共同注意と並ぶ重要な共同注意の現象形態である[34]。ブルーナーの観察した二人の幼児では、一人は9.5月齢で、もう一人は13月齢で、純粋に指差しと見なせる行動

が出現している。指差しは、手を伸ばしてものを取る行動の拡張や変形ではないようである。指差しは、「注意する価値のあるモノを選び出すための原始的な印付けシステム（Bruner, 1983, 75)」であると考えられる[35]。これは発声をともなう。例えば、窓の外のものを見て「ウゥム」と発声しながら指差したり、見慣れたコップが見慣れぬところ（母親の頭の上）にあるのを見て「ダァ」と発声しながら指差したりする行動が観察される（Bruner, 1983, 75)。「ウゥム」「ダァ」のような原指示詞（protodemonstrative）と同時に、“bird”に該当する“*boe*”や、“apple”に該当する“*apoo*”といった非標準的な発声が見られるようになる。こういった発声は、「ウゥム」「ダァ」が出現するのと同じ場所を占める。

ブルーナーは、この段階の幼児について、次のような非常に印象深い観察を報告している。

> 「運良く撮影されたのだが、その夕方、リチャード〔ブルーナーの研究対象の幼児、このとき 13 月齢〕は、室内のゆかの上に座って、上方を指しながら、うわの空でおずおずと、彼にとって“bird”に当たる“*boe*”という語を発した。リチャードは、記憶から呼び出した対象を、彼にとって“現存する”空間中に位置づけたように見えた。彼の“*boe*”という語彙素は、現実の対象が不在の時に空間的な指示表現をともなって自分の言いたい点を名詞的に特定する表現として機能していた。(Bruner, 1983, 76)」

リチャードは、このとき山荘で夏を過ごしていた。そこでミヤマガラスやカササギを見た。しかし、上方を指差して“*boe*”と発声したとき、近くに鳥はいなかった。従って、リチャードは、記憶から呼び出したものについて何か言ったものと考えられる。指差しは、ここでは、現実の空間的位置を示してはいない。

ブルーナーは、この観察を、「指差しが一種の“抽象的な”位置づけ行為（Bruner, 1983, 76)」の機能を果たしたと解釈する。そして、ちょうどこの頃に発達する「あなたのお鼻はどこにある？ *Where's your nose?*」とか、「これは何？*What's that?*」とか、「アノ X はどこにあるの？ *Where's the X?*」といった母親と幼児の問答ゲームと並べて取り扱っている。このような問答ゲームは、記号を、直近にある言語外の要素に結びつけるという意味で、指標語（indexicals）の典型的な学習環境を提供する。記号を直近の言語外の要素と結び付けることが可能になれば、

---

[34] 指差し行動はヒトという種に固有の行動であるらしい。これは野生のチンパンジーではほとんど見られないと言われる。また、指差しは特に右手側で早期に発現するため、左脳（言語中枢）の発達と関連づけて重視される。他方、同種他個体の視線の方向を見るという視覚的共同注意は、鳥類、サル、類人猿等動物界で広く見られる行動である。(Butterworth, 2001, 222-224)

[35] 指差し行動を、手伸ばし・把握行動の変形と見たのはヴィゴツキーである。Bruner, 1983 以後の研究によれば、ここでブルーナーの言うとおり、指差し行動と手伸ばし・把握行動は別種の行動であるとする見方が裏付けられてきているようである。指差しは「原－陳述的（protodeclarative)」な表出であり、手伸ばし・把握行動は「原－命令的（protoimperative)」な表出であるとされる。(Butterworth, 2001, 230)

引き続いて言語内の要素、つまり他の記号と結び付けて使用することが可能になる。幼児は、こうして、発声と世界が結び付くダイクシス（deixis）としての指示表現の使用だけでなく、発話系列の内で相互に参照指示が行なわれるアナフォラ（anaophora）としての指示表現が使用できる段階に移行してゆく。(Bruner, 1983, 76-77)

ブルーナーは観察にもとづいて慎重に論を展開しており、報告されたリチャードの行動についてこれ以上のことを言っていない。しかし、もう少し踏み込んでよいなら、リチャードの行動については、次のような解釈が可能である。指差しが具体的なターゲットの空間的位置を指定する指標的な身振りであり、この身振りが“*boe*”という発声と同時に不在のターゲットを抽象的に指定して使用されているのならば、この指差しは、冠詞の役を果たしていると言ってよい。つまり、リチャードは、“*the* bird”と言いたかったものと見られる。不確定の指示表現に反応するのみの7月齢頃の段階から、不在のターゲットについて確定した指示を行なう段階へ、13月齢頃にはすでに移行し始めている。この観察例は、要するに、幼児が原始的な確定記述を行ないうる段階に達していることを示すように見える。

ブルーナーによる以上の言語習得の一局面の素描では、幼児が不確定の何かへ漠然と注意を促される段階から、確定したターゲットを求めて注意を向ける段階を経て、不在のターゲットに注意を向けることができる段階まで、共同注意の諸段階が順々に出現してくる。そこで、次に、視覚的共同注意の現象を実験室の環境で精密に調べると、どのような段階が識別できるのか確認しておこう。

5．2　視線追尾の3段階

バターワースとジャレットは、幼児の周囲に複数個のターゲットを置き、母親の視線の留まったターゲットを幼児が突き止められるかどうか、条件を厳密に設定して一連の実験を行なった。被験者は、6月齢児、12月齢児、18月齢児の18名の幼児計54名である。このそれぞれの月齢における共同注意能力の発達段階が確認された。(Butterworth and Jarrett, 1991)

実験のために設定されたのは、ちょうど6畳間くらい（奥行き3.95メートル、間口2.6メートル、高さ2.1メートル）の小さな部屋である。部屋の中央付近に、被験者の幼児とその母親が40センチメートルの間隔で正対して座る。ターゲットは20センチメートル四方の黄色のカードボードで、被験者の周囲に4個配置される。配置の仕方は、次のとおりである。

今仮に説明のため、部屋の床面を時計の文字盤になぞらえる。文字盤の中心を挟んで、幼児は12時の方を見て、母親は6時の方を見て、向かい合って座っているとする。この設定で、ターゲットは、例えば2時と4時の位置、および10時と8時の位置、というように左右に2個ずつ置かれる。つまり、左右両方の側に、2個のターゲットが、幼児からの見た視角が相互に60度だけ違うように、ペアにして置かれる。ターゲットの場所はいろいろに置き換えられる。幼児から見て左右の斜め前と斜め後ろという組み合わせだけでなく、左右の真横と真ん前やや斜め、あ

るいは左右の真横と真後ろやや斜めという組み合わせがある。それぞれの設定でどのターゲットを振り向くのかは、実験者から母親に送られるシグナルで、試行ごとにランダムに示される（シグナルは幼児が座っている椅子の下にある)。

母親は幼児とアイコンタクトを維持してから、シグナルに従って、指差しをせずに、無言で、指定されたターゲットを振り向いて6秒間見つめる。それからまた幼児に向き直ってアイコンタクトを再確立し、指示に従って次の試行を行なう。

実験を繰り返してみると、どの月齢の幼児も母親と反対側を向いてしまうことは少ないことが分かった。つまり、部屋のどちら側を向くべきなのかについて、幼児はほとんど混同しない。しかし、幼児の背後にあるターゲットを母親が見たとき、首を回して自分の後ろ側のターゲットを突き止めることは、どの月齢の幼児にも困難であった。そして、幼児は、前を向いて座っている自分の視野の中の（つまり、左右両横から真ん前までの）ターゲットならば、母親が見ているターゲットを突き止めることが相当よくできた。(Butterworth and Jarrett, 1991, 58)

ただし、真横のターゲットについては、月齢によって違いがあることも見出された。幼児の真ん前やや斜めと真横にターゲットを置く組み合わせでは、前を向いて母親とアイコンタクトした状態から、真横を向いた母親の視線方向に幼児が自分の視線を動かして行くと、真ん前やや斜めに置かれたターゲットに最初に出くわすことになる。この設定で母親が真横のターゲット見ている場合、18月齢児は最初に出くわす真ん前やや斜めのターゲットを無視して、2番目に出くわす真横のターゲットまで探索を進めることができた。だが、6月齢児にはそれができなかった。12月齢児は、6月齢児よりは好成績だが18月齢児には及ばなかった。

ところが、同じ真横の位置でも、真横と真後ろやや斜めにターゲットを置く組み合わせでは結果が異なった。この設定では、真横のターゲットが最初に出くわすターゲットになるため、どの月齢児も正しくターゲットを突き止めることができた。このように、ターゲットが視野のどのあたりに位置しているか、また視野の中で正しいターゲットに最初に出くわすか2番目に出くわすかといった相違により、共同注意の成立は月齢に応じて変化することが判明した。(Butterworth and Jarrett, 1991, 61-63)

6月齢児について、どの程度正確にターゲットの位置を特定できるか、別の設定で実験してみると、6月齢児は母親の視線の方向を正しく捉えるが、母親の視線から、ターゲットがどこにあるかという情報を得てはいなかった。すなわち、彼らは、二つ置いたターゲットのうち、最初に出くわす方を注視してしまう。同じ設定で、ターゲットを一つにすると、6月齢児はほぼ間違いなくターゲットのある辺りを見やった。しかし、ターゲットが一つでも、自分の後ろを見ることはやはりなかった。(Butterworth and Jarrett, 1991, 66-68)

18月齢児については、母親の視線を手がかりとして自分の背後の空間を見やることができるかどうかが確かめられた。幼児の前方の空間にはターゲットを全く置かず、後方にだけ、2つのターゲットをペアにして設置する。そして、母親が幼児と正対して座り、実験者の指定するター

ゲットに視線を向ける。すると、18 月齢児は、自分の背後の空間を見やって正しいターゲットを注視することがかなりできた。特に母親が視線を動かすだけでなく頭も動かすようにすると、正しいターゲットを選び出す確率が高まった。前方の空間に何もなければ、18 月齢児は、自分の視野ではない後ろ側の空間、つまり他人だけが見ている空間を探索することができるわけである。(Butterworth and Jarrett, 1991, 63-65)

以上の結果から、バターワースとジャレットは、つぎのような結論を導いている。

第一に、6 月齢児にとって、母親の頭と視線の動きは、どちらを向くべきか大まかな方向を知らせるものとなっている。そしてその方向に何か目立つものがあれば、彼らはそれを注視する。環境中でヒトの注意を引く対象が大人でも幼児でもそれほど違わないならば、この程度の大雑把なやり方でもコミュニケーションの役には立つ。大人がぴくぴく動くターゲットに注意を向けたときなどには、幼児が大雑把にそちらを見やるだけでも同じターゲットに注意が向かう可能性は高いだろう。この共同注意の仕組みは、ヒトと環境との相互作用に依存しているので、生態学的メカニズムと呼ばれる。(Butterworth and Jarrett, 1991, 69)

第二に、12 月齢児は、生態学的メカニズムに加えて幾何学的メカニズムを持つようになっている。幼児は、母親の視線の投射先をかなり正確に自分の視野の中で推定して、ターゲットの位置を特定できるようになる。よく似たターゲットでも、位置が違っていれば、そのどちらを母親が見ているのか選別できる。しかし、12 月齢児は、母親の視線の方向に沿って、自分の背後の空間を見やることはまだできない。(Butterworth and Jarrett, 1991, 70)

第三に、18 月齢児は、自分と母親と対象とを包含する「容れモノとしての空間という表象(a representation of space as a *container*)」を持つようになっていて、その中で他人の注意が向けられているターゲットを探すことができるようになっているらしい。自分の背後の空間にあるターゲットを振り向いて特定できるのは、自分の視野という空間が知覚されているだけでなく、容れモノとしての空間という表象が成立しているからであると考えられる。(Butterworth and Jarrett, 1991, 70)

こういった視覚的共同注意の実験報告が明らかにしているのは、バターワースの考えでは、次のことである。

> 「幼児は自分の視覚野が他人にも共通して保有されている(もちろんこれは正しい!)と見なしている。知覚は必然的に或る特定の視点から始まる。しかし、この結果が示す通り、幼児は、他人もまた共通の空間上にパースペクティヴを持つことが可能であることを知覚してもいるのである。そういうわけで、……共同注意課題は、他人もまた諸対象からなる世界を知覚していることに幼児が気づいているということを示している。対象物が幼児と大人の公共的な媒介物として役立っている。(Butterworth, 1994, 124)」

他人が何かに気づいていることに自分が気づき、その何かを突き止めることができるということは、ものを仲立ちにして他人の気づきの内容に出会う、ということである。知覚される公共的な世界の中で、他人の注意が向けられている対象を選び出して共有することは、共通の世界に相対している他人の心を知覚することに同じなのである。ただし、6月齢や12月齢の幼児は、大人と同じように心を解釈しているわけではないから、他人の中に信念や欲求や意図を読み取っているわけではない[36]。そうではなくて、これらの幼い幼児は、環境世界を他人の心が浸透した状態で直接的に捉えるのである。視覚的共同注意や指差しの理解、或いは、幼児による模倣といった現象は、「行動を通じて表現され、知覚を通じて媒介される他人の心の直接的な理解を明らかにしている（Butterworth, 1994, 118)」と考えられる。

あえて「心」に言及せずに表現するなら、環境と相互作用する生きている身体は、他の身体が頭や視線を振り向けている何かに気づくことを通じて、それらの動作によって秩序付けられた世界を捉えるのだ、と言ってもよい。そして、同種の他の個体の頭や視線の向き、指差し行動、随伴する音声、情動の表出と受容、ものの取得と交換、などによって時々刻々新たに秩序付けられる世界を生きるということが、幼児が他人の心を直接的に理解しているということなのである。

こうして他人の心を環境の中に見つけることはできるとしても、自分の心、つまり対象化された「私」は依然として見つけられていない。だが、対象化された「私」に到達する手がかりも、共同注意現象の中にひそんでいる。先にブルーナーによる言語習得の一過程の素描を通じて見たように、「あなたのお鼻」「あのX」といった指標語は、視覚的共同注意や指差しによる指示の習得と同時に理解されるようになる。人々の指示行為によって世界内の対象が特定され識別され、何らかの特定のコミュニケーション意図の下で（例えば、「……はどこにあるの？」）共有される。マイケル・トマセロは、このようなコミュニケーションの中で自分に向けられた他人の意図を知覚することが、自分自身を対象にする形式の自己認知が幼児の中に形成されてくることと関わりが深いと論じている。その議論を最後に見ておくことにする。

5．3　共同注意と自己の対象化

視覚的共同注意は、単純に定義すれば、「誰かが見やっているところを見ること（Butterworth, 2001, 213)」である。この意味での視覚的共同注意の例は、動物の世界にも見出される（Butterworth, 2001, 216)。同種の他の個体の頭の向きは、しばしば興味深い対象が存在する有力な手がかりになる（Tomasello, 1995, 106)。スカイフとブルーナーの実験も、バターワー

[36] 18月齢の幼児は、ヒトの意図を読み取る。実験者が単純な器具を使った動作をやり損なって失敗するのを見せられると、18月齢児は、その器具を用いて動作の成功した状態を自ら完成させる。つまり、中断された動作の中に最終目標や達成意図を見て取って、予想される完成状態を自ら作り出す。ところが、類似の動作を機械がやり損なうのを見ても、幼児はあえてその動作を完成させようとはしない。18月齢児は、ヒトとモノを区別し、ヒトの意図を読み取って行為するのである。(Meltzoff, 1995)

スとジャレットの実験も、この単純な定義に則って実施されていた。

しかし、共同注意とは、たんに視線が一致することではなくて、まさに注意が共同的に行われることであると考えるなら、上の単純な定義では足りなくなる。注意が共同的になるためには、「別々の個体がお互いの注意の焦点について知識を共有し、一方の人物の注意の焦点がもう一方の人物の注意の焦点によって統制されている（Butterworth, 2001, 213)」という相互作用が求められるからである。

マイケル・トマセロ（Michael Tomasello）は、たんなる視線の向きの一致ではなく注意の共同性を条件とした場合、本当に共同注意現象が出現するのは、早くとも 9 月齢頃、普通は 1 2 月齢頃であるとする。6 月齢児は、母親の視線（頭の向き）の変化を手がかりにして、母親と同じ方向に視線を向ける。しかし、バターワースとジャレットが確認したとおり、彼らはターゲットを正確に特定することはできない。同じ方向に注意を向けても、大人と同じ対象に注意を向けるかどうかは、ターゲットの側の条件（目立つかどうか）に依存する。この場合、たまたま同一の対象に注意が向かったとしても、6 月齢児には、大人と自分が注意を共有しているという認識はないだろう。彼らは、たかだか、大人の行動を手がかりとして、興味深いものを見つけることができただけである。

共同注意は、厳密に言えば、二人の人物が共通のものに注意を向けているとお互いに分かっている、という相互認知の状態である。この状態は、幼児が大人と同一の対象に視線を向けながら大人の顔にも目をやる、という行動をとることでほぼ確認できる。この動作は子供が大人の注意をチェックしていることを示すからである（Tomasello, 1995, 106)。したがって、本当に共同注意が存在すると言えるのは、「子供が対象と大人とに向かう自分の注意を調整するのと同時に、大人がその同一の対象と子供への注意を調整する（Tomasello, 1995, 107)」場合なのである。この、相互に注意を調整する働きは、「相手方が自分と同一の対象に注意の焦点を向けていることを理解するという方法によって（Tomasello, 1995, 107)」達成されている。

トマセロは、注意の相互調整という規準を設定した場合、前述のように共同注意の出現は 9 月齢頃から 12 月齢頃になると主張する。この時期は、視線追尾（gaze following）のほかに、社会的な問い合わせ（social referencing）や模倣による学習（imitative learning）といった社会的なスキルが踵を接して現れてくる時期である（Tomasello, 1999, 64；Tomasello, 2001, 150)。社会的問い合わせとは、幼児が見知らぬ人やものや出来事に出くわしたとき、親を見やり、親がそのとき示す態度に合わせて、自分も状況に対処する現象を言う。たとえば、リモコンで動く蜘蛛のオモチャが近づいてきたとき、親を見やって親が怖がっていると、幼児はオモチャに近づかない。だが、親が楽しそうにしていれば、それに近づく（Baldwin, 1995, 135)。これは共同注意能力の一つの現象形態と見なされうる[37]。また、模倣も、この時期には、大人が事物に対して行う動作を、その目的に沿って模倣するという形が現れてくる（Tomasello, 2001, 150；Meltzoff, 1995)。視線追尾、社会的問い合わせ、模倣学習といったスキルがほぼ同じ頃に出現し

てくるのは、トマセロによれば、「これらのスキルがすべて、他の人々を意図的な行為者(intentional agents)として理解するという、幼児がこのとき見せ始める能力を反映している(Tomasello, 2001, 150)」からである。

共同注意は、一般化すれば、幼児と親と対象からなる3者関係の或る構造である。6月齢児は、対象をつかみ、手で取り扱うことができるし、親と情動的なコミュニケーションを交換することもできる。だがこれらは2者関係である。視線追尾、社会的問い合わせ、模倣学習といった共同注意能力の発現形態は、親が或る対象をどう見てどう取り扱うかを幼児が理解し、それに合わせて自分も行動する、という3者関係の構造を備えている。6月齢児は、親の視線を追尾しても、親がどの対象を見ているかすら正確には特定できないのだから、親が特定の対象をどう見ているかは6月齢児の問題ではない。たまたま親の視線が手がかりになって環境中に見つけた対象が興味深ければ、それに注意を向けるだけである。6月齢児と対象との関係は、結局2者関係でしかない。これに対し、共同注意において本当に重要なのは、相手がどんな意図をもって対象に相対しているのかを読み取ることであるはずだ、とトマセロは言っているわけである。(Tomasello, 1999, 64)

それでは、幼児が9月齢から12月齢頃に意図を備えた存在として他の人物を理解するようになるのは、いったいなぜなのだろうか。「意図的(intentional)」という言葉でトマセロが言おうとしているのは、〈或る目的を達成するために、注意を向ける対象を選別し、目的達成の手段を選択して行動する〉というヒトの行動上の特性だけである[38](Tomasello, 1999, 64)。新生児は、この意味で意図的な存在ではない。1月齢でも幼児は自分の行動が外界に何らかの効果を及ぼすことが分かるが、どうやってそれを実現したのかは分からない。6月齢から8月齢の幼児は、面白い効果を生む行動を繰り返すことはできるが、状況が変化したときに行動を改めることはできない。彼らは、目的に向かって行動しているが、手段と目的の関係はまだよく分かっていない。しかし、8月齢頃から、幼児は、例えば、オモチャを取りたがっているときに、幼児とオモチャの間に障害物(枕)を置いてやると、それを取り除いてオモチャに手を伸ばすことができるようになる。あるいは、大人の手を引っ張ってオモチャを取らせることもある。つまり、8月齢頃から、幼児は、目的と手段を分離し、環境に注意を向けて適切な手段を選択するようになる。トマセロの言う意味で、意図的存在になってくるのである。(Tomasello, 1999, 66-67)

---

[37] しかし、ボールドウィンは、社会的問い合わせをただちに共同注意の一形態と見なす立場に疑問を提示してみせる。幼児は親の態度を参照しているのではなくて、親を見て安心したいだけなのかもしれない(Baldwin, 1995, 136-8)。共同注意現象は、常に、他人の意図の読み取りを含まない仕方で解釈可能である。結局、意図の読み取りが間違いなく生じていると言えそうな行動の例は、言語の習得だけである。そこで、ボールドウィンは、言語の習得過程を精密に吟味することによって、1歳から2歳の幼児が共同注意能力を備えているということを立証する方向を取り、肯定的な実験結果を得ている(Baldwin, 1995)。

[38] 哲学で言うところの志向性(intentionality)、すなわち、〈心的活動はすべて何ものか「について」の活動である〉といった特徴づけとは関係がない、と注意している。(Tomasello, 1995, 105)

トマセロは、この意味で幼児自身が意図的になることが、他人を意図的存在として理解するための基本的な条件であると見なす。そこで、本当の意味での共同注意、すなわち、他人がどんな意図をもって対象に相対しているのかを理解して、自分の行動を統制することができるようになるのは、おおむね 9 月齢以降になるわけである。

ただし、自分が意図的存在であるからといって、同種の他の個体を意図的存在として理解するとは限らない。チンパンジーなどの類人猿は、トマセロの言う意味で意図的な存在ではあるが、同種の他の個体を意図的存在として理解してはいないらしい（Tomasello, 1999, 70)。自分が意図的であるように他人もまた意図的である、という理解をするためには、自分と他人を橋渡しする仕掛けが必要になる。トマセロは、ここで新生児でも大人を模倣するという事実に着目する。模倣は、自分を相手に似せる行動である。それならば、「幼児は、非常に早くから他の人物が“私に似ている（like me)”と見ているので、自分自身の新しい機能を理解すると、それがただちに他の人物の機能の新しい理解に結びつく（Tomasello, 1999, 68)」のだ、と言ってよいのではないかと推測する[39]。これは、幼い幼児でも、他者を理解するために自己の事例にもとづいて一種のシミュレーションをする、ということにほかならない（Tomasello, 1995, 122；Tomasello, 1999, 68)。

このシミュレーションをヒトに特有の処理過程として仮説的に導入してよければ、幼児は、9 月齢から 12 月齢頃に自分自身が環境の中で適切な手段を選んで目的を達成できるようになることから、他のヒトも同じように目的を目指し手段を選別する存在として理解できるようになると考えられる。こうして、他の個体が環境中の対象に向ける意図（何を目的としてどういう手段を取るか）を読み取り、その意図に即して対象を取り扱うこと（同じものを注視する、同じ態度を取る、同じ行動を真似る等）が可能になる。そういうわけで、トマセロによれば、本当の共同注意が成立するのは、他人が意図的な存在であることを理解できるようになるこの頃だ、ということなのである。

他人の意図を読み取るようになると、幼児は、その意図がほかならぬ自分に向けられている場合があることも理解するようになる。そしてここから自分を対象とした理解、つまり概念的な自己把握の萌芽が生まれてくる。

大人が幼児に言葉を教えるとき、大人の行動は特異な意図の形式を備えている。大人が幼児に

[39]「自分に似ている“like me”」という認知は、「自分に“me”」という言及を含む以上、自己の原始的な対象化ないし概念化をともなうように見える。従って、マイケル・ルイスが注意したとおり、非常に幼い幼児に自己対象化の能力を付与してはならないのだとすれば、ここでのトマセロの「推測」はルイスの注意への違反の可能性がある。しかし、非常に幼い幼児の模倣行動は、自己対象化の能力の自覚的な行使ではなく、自己対象化の無自覚な実行（非概念的な実現）であると言えるかもしれない。新生児は、自分の表情を判明に対象化する中間段階を経ることなく、大人の表情の視覚的入力から直ちに自分の表情筋の運動を出力すると考えられるからである（Meltzoff and Moore, 1983, 708)。幼児の模倣行動に内在する自己対象化の問題は興味深いが、本論文ではこの問題には立ち入らず、トマセロの「推測」をさしあたり受け入れることにする。

向かって、或る興味深い出来事を指差しながら、「わんちゃん！」と言ったとする。大人の意図は、この場合、出来事に向かっていると同時に、幼児に向かっており、なかんずく幼児の意図や注意のあり方に向かっている。幼児が理解しないといけないのは、「大人がこちら〔幼児自身〕に何か意図的なこと――すなわち、現在進行中の出来事のある側面に注意を向けること――をやらせる目的を持って、この聞き慣れない音を発している（Tomasello, 2001, 151)」ということである。これこそ、「他人が私（*me*）に対してXに注意を振り向けるよう望んでいるということを理解すること、つまりコミュニケーション意図を理解すること（Tomasello, 1999, 72)」にほかならない。「この定式化が明示的に自己（つまり「私“me”」）に言及していることに、注意すべきである（Tomasello, 1999, 71)。」言い換えれば、コミュニケーション意図の理解において、初めて、幼児がとらえている他者の意図の中で幼児自身が対象化されて出現してくるのである。

言葉を学ぶことは、他者の意図の中で対象化された自分を、もう一度、発話という行為の中で主体にもどすことである。「子供が大人の行為を“この人はこの音を私にあのわんちゃんへと注意を向けさせるために言っているのだ”というように理解するならば、子供が大人の行為を学んで模倣するには役割を入れ替える必要がある、ということが意味される。すなわち、私が、他人にあのわんちゃんへと注意を向けさせたいのなら、私は、他人に向かって“わんちゃん”という音を使わなければならない、ということなのである。(Tomasello, 2001, 152)」

言葉を学びコミュニケーションが成り立つとは、主体である自己が他者のコミュニケーション意図の中で対象化され、対象化された自己が自らの言語行為の中で再び主体になる、ということの繰り返しを経験することである。幼児が大人のコミュニケーション意図を理解するということは、他者の意図の中で対象として現れる自己も、自分自身の言語行為の中で主体として現れる自己も、ともに視野に収めることができるようになることを意味している。あるいは、コミュニケーションの中で、初めて、対象性と主体性という二側面を備えた自己が浮かび上がってくると言ってもよい。こうして、私たちは、幼児が対象化された「私」に遭遇する局面を、共同注意という現象の中で見つけたわけである。

6. むすび

私たちは、ヒンティカのコギト解釈に沿って、一人称の代名詞「私」を理解する能力の基盤を探り、一人称の発話が生き物としてのヒトの身体的自己把握を根底に持つことを見出した。ヒトは社会性の動物であることから、私たちの一人称の発話が、生きている身体を自然的世界と道徳的世界の両方に位置づける機能を持つことが確認された。そこで、言語習得以前の幼児の認識の構造を探求し、私たちの一人称の発話が備えている自然な出発点をとらえることが試みられた。

幼児が自然的世界に位置づけられており、それを幼児が認識していることは、幼児における生態学的自己の認識によって確認された。幼児が道徳的世界に位置づけられており、それを幼児が

認識していることは、幼児における間人物的自己の認識によって確認された。しかしながら、これらの自己認識は、環境を認知して行動することと、同種の他の個体を認知して情動的表現を交換することにおいて、行動の存立の事実的基盤である直接的な身体的自己把握として存在しているのみであることが同時に確認された。すなわち、これらの自己認識は、自己を対象化して認識することとは区別されねばならないことが明らかになった。

幼児が自己を対象化する契機となるのは、他の個体が環境中の何ものかに注意を向けていることに幼児が気づく、という経験である。この共同注意の能力は、6月齢頃においても、母親の視線の方向を見やるという動作のかたちで実現されている。12月齢から18月齢にかけて、この能力は、他人の意図を読み取る心的なかたちに変貌し、真に共同注意と言いうるものとなる。幼児は、共同注意の経験の中で、自分とは違う関心を持って生きている個体の存在に気づくのである。

ヒトのコミュニケーション意図は、相手の心的状態を目標として、それに働きかけようとする意図である。幼児は、大人との共同注意の経験の中で、自分自身が大人のコミュニケーション意図の目標になっている事実に気づく。このとき幼児は、初めて、他人の意図の中で対象化されている自分、という存在に遭遇する。幼児は「私」という対象化された存在、すなわち、概念的な自己を構築して行く端緒を、こうして12月齢から18月齢頃の大人とのコミュニケーションの中でとらえるのである。

この後、ヒトはエピソード記憶と心の理論の獲得を基礎として自伝的記憶を形成し、自分の生きる社会の理想的自我のイデオロギーと相互作用しながら、同一性をもった一個の人物として生きて行くことになる。

参考文献表

Baldwin, D. A. (1995). Understanding the Link Between Joint Attention and Language. In Moore, C. and Dunham,P. J. (Eds.), *Joint Attention: Its origins and Role in Development* (131-158). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum.

Bruner, J. (1983). *Child's Talk*. New York: Norton.

Bruner, J. (1990). *Acts of Meaning*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Burks, A. (1949). Icon, Index, and Symbol. *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 9, No. 4, 673-689.

Butterworth, G. (1990). Self-Perception in Infancy. In Cicchetti, D. and Beeghly, M. (Eds.), *The Self in Transition: Infancy to Childhood* (119-137). Chicago: The University of Chicago Press.

Butterworth, G. (1991). The Ontogeny and Philogeny of Joint Visual Attention. In Whiten, A. (Ed.), *Natural Theories of Mind: Evolution, development, and simulation* (223-232). Oxford: Blackwell.

Butterworth, G. (1992). Origins of Self-Perception in Infancy. *Psychological Inquiry*, Vol.3, No.2, 103-111.

Butterworth, G. (1994). Theory of Mind and the Facts of Embodiment. In Charlie Lewis and Peter Mitchell (Eds.), (1994). *Children's Early Understanding of Mind* (115-132). Hove UK: Lawrence

Erlbaum.

Butterworth, G. (1995). An Ecological Perspective on the Origins of Self. In Bermúdez, J. L., Marcel, A. and Eilan, N. (Eds), (1995). *The Body and the Self* (87-105). Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Butterworth, G. (2001). Joint Visual Attention in Infancy. In Bremner, G. and Fogel A. (Eds.). (2001). *Blackwell Handbook of Infant Development* (213-240). Oxford: Blackwell.

Butterworth, G. and Hicks, L. (1977). Visual proprioception and postural stability in infancy. A developmental study. *Perception*, Vol.6, 255-262.

Butterworth, G. and Jarrett, N. (1991). What minds have in common is space: Spatial mechanisms serving joint visual attention in infancy. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, 55-72.

DeCasper, A. J. and Fifer, W. P. (1980). Of Human Bonding: Newborns Prefer their Mothers' Voice. *Science*, New Series, Vol.208, No.4448, 1174-1176.

Eilan, N., Marcel, A. and Bermúdez, J. L., (1995). Self-Consciousness and the Body: An Interdisciplinary Introduction. In Bermúdez, J. L., Marcel, A. and Eilan, N. (Eds), (1995). *The Body and The Self* (1-28). Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Gallup Jr., G. G. (1992). Levels, Limits, and Precursors to Self-Recognition: Does ontogeny Recapitulate Phylogeny? *Psychological Inquiry*, Vol.3, No.2, 117-118.

Gibson, J. J. (1966). The Obtaining of Stimulation. In Gibson, J. J. (1966). *The Senses Considered as Perceptual Systems* (31-46). Boston: Houton Mifflin.

Gibson, J. J. (1964 (1982)). The Uses of Proprioception and the Detection of Propriospecific Information. In Gibson, J. J. (1982). *Reasons for Realism: Selected Essays of James J. Gibson* (164-171). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum.

Glock, H-J. and Hacker, P. M. S. (1996). Reference and the First Person Pronoun. *Language & Communication*, Vol.6, No.2, 95-105.

Harré, R. (1998). *The Singular Self*. London: Sage.

Hintikka, J. (1962 (1968)). Cogito Ergo Sum: Inference or Performance? *Philosophical Review*, Vol. LXXI, No.1, Jan. 1962, 3-32. [In Doney, W. (Ed.). (1968) *Descartes: A Collection of Critical Essays* (108-139), Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press.]

Jackson, F. (1982). Epiphenomenal Qualia. *Philosophical Quarterly*, 32, 127-136.

Jackson, F. (1986). What Mary Didn't Know. *Journal of Philosophy*, Vol. 83. No.5, 291-295.

片岡義男 (1997)『日本語の外へ』筑摩書房

Lee, D. N. and Aronson, E. (1974). Visual proprioceptive control of standing in human infants. *Perception and Psychophysics*, Vol.15, No.3, 529-532.

Lee, D. N. and Lishman, J. R. (1975). Visual Proprioceptive Control of Stance. *Journal of Human Movement Studies*, 1, 87-95.

Leslie, A. (1987). Pretence and Representation: The Origin of "Theory of Mind". *Psychological Review*, Vol. 94, No. 4, 412-426.

Leslie, A. (1994). Pretending and Believing: Issues in the theory of ToMM. *Cognition*, 50, 211-238.

Lewis, M. (1995). Aspects of Self: From systems to ideas. In Rochat, P. (Ed.), *The self in early infancy: Theory and Research* (95-115). North Holland: Elsevier Science Publishers.

Lewis, M. (1997). The Development of a Self: Comments on the Paper of Neisser. In Snodgrass, J. G. and Thompson, R. L. (Eds.). *The Self Across Psychology: Self-Recognition, Self-Awareness, and the Self Concept* (279-283). New York: The New York Academy of Sciences.

Locke, J. (1975). *An Essay concerning Human Understanding*. Oxford: Oxford University Press.

Mellor, D. H. (1991). I and now. In Mellor, D. H. (1991). *Matters of Metaphysics* (17-29). Cambridge UK: Cambridge University Press.

Meltzoff, A. (1995). Understanding the Intentions of Others: Re-Enactment of Intended Acts by 18-Month-Old Children. *Developmental Psychology*, Vol. 31, No.5, 838-850.

Meltzoff, A. and Moore, M. K. (1977). Imitation of Facial and Manual Gestures by Human Neonates. *Science*, 198, 75-78.

Meltzoff, A. and Moore, M. K. (1983). Newborn Infants Imitate Adult Facial Gestures. *Child Development*, 54, 702-709.

Meltzoff, A. and Moore, M. K. (1994). Imitation, Memory, and the Representation of Persons. *Infant Behavior and Development*, 17, 83-99.

Meltzoff, A. and Moore, M. K. (1995). Infants' Understanding of People and Things: From Body Imitation to Folk Psychology. In Bermudez, J. L., Marcel, A. and Eilan, N. (Eds.). *The Body and The Self* (43-69). Cambridge Massachusetts: MIT Press.

Mühlhäusler, P. and Harré, R. (1990). *Pronouns and People: the Linguistic Construction of Social and Personal Identity*. Oxford: Blackwell.

Murray, L. and Trevarthen, C. (1985). Emotional Regulation of Interactions Between Two-month-olds and Their Mothers. In Field, T. M. and Fox, N. A. (Eds.), *Social Perception in Infants* (177-197). Norwood , New Jersey: Ablex.

Nadel, J., Carchon, I., Kervell, C., Marcelli, D., and Réserbat-Plantey, D. (1999). Report: Expectancies for social contingency in 2-month-olds. *Developmental Science*, 2.2, 164-173.

Neisser, U. (1988). Five Kinds of Self-knowledge. *Philosophical Psychology*, Nol.1, No.1, 35-59.

Neisser, U. (1997). The Roots of Self-Knowledge: Perceiving Self , It and Thou. In Snodgrass, J. G. and Thompson, R. L. (Eds.), *The Self Across Psychology: Self-Recognition, Self-Awareness, and the Self Concept* (19-33). New York: The New York Academy of Sciences.

Nelson, K. (1996). *Language in Cognitive Development*. Cambridge UK: Cambridge University Press.

Nelson, K. (2003). Narrative and Self, Myth and Memory: Emergence of Cultural Self. In Fivush, R. and Haden, C. A. (Eds.), *Autobiographical Memory and the Construction of a Narrative Self* (3-28). Mahwah , New Jersey: Lawrence Erlbaum.

Nichols S. and Stich, S. (2003). *Mindreading: An Integrated Account of Pretence, Self-Awareness, and Understanding Other Minds*. Oxford: Oxford University Press.

Nida-Rümelin, M. (2002). Qualia: The Knowledge Argument. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (*Fall 2002 Edition*), Edward N. Zalta (ed.),
URL = <http://plato.stanford.edu/archives/fall2002/entries/qualia-knowledge/>.

Perner, J. (1988). Developing sematics for theories of mind: From propositional attitudes to mental representation. In Astington, J. W., Harris, P. L. and Olson, D. R. (Eds.). *Developing Theories of Mind* (141-172). Cambridge UK: Cambridge University Press.

Rochat, P., Neisser, U. and Marian, V. (1998). Are Young Infants Sensitive to Interpersonal Contingency? *Infant Behavior and Development*, 21(2), 355-366.

Scaife, M. and Bruner, J. S. (1975). The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, Vol.253, 265-266.

Shoemaker, S. (1959). Personal Identity and Memory. *Journal of Philosophy*, Vol. 56, No.22, pp.868-882.

田村　均 (2000)「私は考える、ゆえに、なにがあるのか？　――コギトの自然化と社会化のこころみ――」『名古屋大学文学部研究論　哲学 46』35-80.

田村　均 (2004)「私は考えるとは、何をすることのなのか？　――心の理論に関する発達心理学の最近の研究から――」『名古屋大学文学部研究論　哲学 50』41-91.

Tomasello, M. (1995). Joint Attention as Social Cognition. In Moore, C. and Dunham,P. J. (Eds.), (1995). *Joint Attention: Its origins and Role in Development* (103-130). Hillsdale , New Jersey:

Lawrence Erlbaum.

Tomasello, M. (1999). Having Intentions, Understanding Intentions, and Understanding Communicative Intentions. In Zelano, P. D. Astington, J. W. and Olson,D. R. (Eds.), (1999). *Developing Theories of Intentions: Social Understanding and Self-Control* (63-75). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.

Tomasello, M. (2001). Perceiving intentions and learning words in the second year of life. In Bowerman, M. and Levinson, S.C. (Eds.), (2001). *Language Acquisition and Conceptual Development* (132-158). Cambridge UK: Cambridge University Press.

Trevarthen, C. (1993). The self born in intersubjectivity: The psychology of an infant communicating . In Neisser, U. (Ed.), *Perceived Self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge* (121-173). Cambridge UK: Cambridge University Press.

Trevarthen, C. and Aitken, K. (2001). Infant Intersbujectivity: Research, Theory, and Clinical Applications. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, Nol. 42, No.1, 3-48.

Tye, M. (2003). Qualia. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (*Summer 2003 Edition*), Edward N. Zalta (ed.), URL = <http://plato.stanford.edu/archives/sum2003/entries/qualia/>.

Van Gulick, R. (1997). Understanding the Phenomenal Mind: Are We All Just Armadillos? Part I: Phenomenal Knowledge and Explanatory Gaps. In Block, N., Flanagan, O. and Guzeldere, G. (Eds.). (1997) *The Nature of Consciousness: Philosophical Debates* (559-566). Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

Wellman, H. M. and Bartsch, K. (1988). Young children's reasoning about beliefs. *Cognition*, 30, 239-277.

Wellman, H. M. and Estes, D. (1986). Early Understanding of Mental Entities: A Reexamination of Childhood Realism. *Child Development*, 57, 910-923.

Wimmer, H. and Perner, J. (1983). Belief about beliefs : Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13 103-128.

Abstract

Before I know I am thinking: *Cartesian Ego* and the Self-Knowledge in Infancy

Hitoshi Tamura

The certainty of the Cartesian *cogito* argument can be analyzed into the immunity to the error through misidentification of the referent of the first person indexical. In any language, the speaker's living human body is the object that the first person expressions are intended to refer to, or rather, to be causally and semantically connected with. A child cannot learn to use the first person pronoun or any other linguistic apparatus for first person expressions unless she has had some prior, nonlinguistic access to her *self*. An infant's first access to her living human body, i.e. *person*, is made by way of the proprioceptive functions of the perceptive system in interacting with the environments and other human beings. Thus the ecological self and the interpersonal self are established almost just after birth. The firm grip of these selves lies beneath any form of human activities but this is not enough to provide the referent for the use of first person expressions. Some sort of *objective* self-awareness is indispensable. Before learning speech, an infant show the ability to have the experience of joint attention with adults. In their experience of joint attention, an infant could recognize a situation in which she finds herself to be the target of the adult's peculiar intention toward her: the communicative intention to make some influence upon her intentional states. Michael Tomasello insists that a child has her first experience of being objectively aware of her *self* in such social situations in which she becomes the *object* of someone else's communicative intention. This experience could be regarded as the foundation of the *objective* self-awareness and the concept of self. Thus, the Cartesian *ego* has its roots in the human communicative activities and not in the absolute contemplation performed in solitude.